
女装天女！

フィサリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女装天女！

【Zコード】

Z5587Y

【作者名】

フィサリア

【あらすじ】

「女装ヤクザ・幽姫洋一、艶やかに降臨!」

ありえないシチュエーションが織り成す、ハイテンション・スクラップステイックアクションコメディ。

FC2小説に掲載しているものです。

長編ですので、どうか気楽にゆっくりとお楽しみください。

全身が樂にうつる大きな鏡の前に洋一は立つた。

鏡の中には、何も身に付けていない、生まれたままの自分の姿がある。

洋一の目が、その後ろにあるワードローブへと移動する。

開かれたその扉の中にある、無数の服。多種類のバッグ。

そしてウイッグ。

それらは全て女物だ。

「クリヒビ」が鳴った。

「…………今なら引き返せる、やめろ、やめるんだ！」

内なる己の声に、洋一の動きが止まった。

「…………なんでヤクザの俺がこんな」と…………

もう一人の自分がため息をつく。

そして洋一は、呼吸をするのも忘れて固まつた。

彼は幽姫洋一 30歳。

この街の暴力団組織、紅椿一家会長の不肖の息子、つまり跡継ぎである。

関西の指定暴力団に所属する紅椿一家は、全国レベルからいえば吹けば飛ぶようなちっぽけな組だが、この地方都市では、商業・工業・政治と、あらゆる分野に根を張る、裏の実力者だった。

その「代田」と言われる洋一は、全身でヤクザを表現している父・義隆とちがって、銀河鉄道の某美人もうつむいて泣き崩れるといわれるくらいい美しい眼と身体をした、母・凜にそっくりだった。

そのせいでやたらとモテた。女性はもううん男にも。

言い寄る女の子たちには愛のキスを。

鼻息を荒げて近寄る男どもには重い拳を、おしみなく与えてきた。そうやって生きているうちに、ヤクザの息子という肩書きも後押しして、いつの間にか立派な次期「代田」と言われるようになっていた。持ち前の美貌とは裏腹な洋一の凶暴性と悪事の際の頭のキレも、これから彼の地位をゆるがないものとしていた。

今夜もこの街で一番のクラブで飲み明かし、お姉さんたちの決しておせいじではない熱い視線に見送られて店を出た洋一は、送るという組の者をムリヤリに帰すと、一人深夜の街を歩き出した。

「二代田、『いくつさんつス！』
「おつかれさまっス！」

洋一の姿はどこへ行つても目につくらし。

道行く多種の人々からそんな挨拶が彼に贈られた。

洋一は鷹揚にそれらを受けながら、少し足を早めて通り過ぎてゆく。

盛り場を離れ、シャッターの下りた商店街へと足を踏み入れたところで、洋一は止まってあたりを見回した。

照明に照らされたアーケードの中は、人づきひとづおりあり、まるで墓場のようにシーンと静まり返っている。

洋一のなで肩がガクリと落ち、弱いため息が口から漏れた。

・・・・・ やつと独りになれた・・・・・

さつきまでの辺りを睥睨する目と威圧する足取りは消え、美しい大きな瞳をつるませ、長いまつげをしばたかせて、また歩き出した。
・・・・・ じつじこつなつちやつたのかなあ・・・・・
うつむいて歩きながら、独りになるところも考へることをまた心中で繰り返した。

本当の洋一は、その姿形を同じで、とても纖細で華奢な心の持ち主だった。

学問、スポーツともに優秀。華道、茶道、日本舞踊は師範級。

おまけに絵を描き、詩を作り、歌までうたうという、西洋のルネッサンス人の生まれ変わりのような母に似たのだと洋一は思っている。

むらがる女の子たちに対応していくうちに、無類の女づたらしと尊

されるようになり、いやらしい田で言い寄つてくる男どもの顔面をグーで連打してしりぞけていたら、狂犬と呼ばれるようになつた。全てはふりかかつてくる火の粉を払うための諸行だったのに、やがて誤解はくつがえせないほど深まり、今ではヤクザである。

洋一は、巖を刀で斬りつけてから、それにエロスを塗りたくつたような父のいやらしい顔を思い出して、ブルルと身を震わせた。

-----イヤだ！絶対にあいつみたいになりたくない！
しかし、彼はヤクザである。

同類、それも組織経営なら親をもしのぐと言っていた。

少しでもヤクザらしくするために坊主に刈つてある髪-----本当は綺麗で細く明るい栗色の髪だった-----をガリガリといた。

次に洋一は、アルフォンス・ミュシャ描く女性に、菩薩の知性と微笑みを足して、神が造りたもうたフィギュアを持つ、母の姿を思い浮かべる。

-----ああ、かあさんはやつぱすこいなあ、カンペキだ-----
・ なんであいつなんかと結婚したんだりう

ここで彼の為に断つておぐが、洋一はいわゆる世間でこいつマザコンではない。

母である凛は、女性と言ひ偶像を極めた存在ではあつたが、立派な社会人でもあり、己の息子に惑溺などせず、また必要以上に彼を精神的に近づけたりはしなかつた。

だいたい彼女自身がヤクザの娘だったのである。

だから洋一は純粹に、まるで少女が宝塚の男役に憧れるような気持ちでもつて、母のことを敬愛しているだけなのだ。

しかしその母は、洋一が小学校にあがつた年に家を去り、そして成人した年に住んでいたマンションの鍵とあるものを置き土産にして、イタリア人のダーリンと共にフィンランドへと旅立ってしまった。

洋一は世界地図を片手に、そのフィンランドを探したこともある。南米のどこか、たしかコーヒー豆の産地だつたと思つていたその国は、バルト海に面した北欧の寒い国であった。緯度、軽度共にまったくちがつていたし、なによりも日本からは遠すぎた。

洋一は涙を飲んで、母に頼るのをやめ、己で生きなければならぬ。まあ実際の話、生きていくのは楽勝でできるのだが、幸せとは程遠いクライムな世界でこれからもやつていくのかと考へると、気がどんどん滅入つてくるのだった。

逃げ場はなく、またやりたいこともない。ただ行き詰まり感だけがあつた。

かといって、盗んだバイクで走り出すようなことはとつづくの昔に済ませてあるし、だいたい30でヤクザの自分がまたそれをするわけにはゆかない。

-----どうしてこうなつちゃつたかなあ-----
結局、この問い合わせつてくるという無限ループの中、洋一が切ないため息をついたとき、アーケードの脇の暗がりから、とつぜん人が飛び出してきた。

いつもの洋一なら母ゆずりの運動神経でヒラリとかわすのだが、落ち込んでため息をついている最中だったのでもともとぶつかってしまった。

急に自分の懷に飛び込んできた人物は、黒いヒラヒラの布で出来たメイド服っぽいもの着ていた。女の子のようだった。

突つ込まれたわき腹が痛かつたが、ヤクザモードでないと彼は優しい。

どなりもせず、彼女の肩をそつとつかむと、
「大丈夫ですか？」と声をかけた。

「「めんなさい、すみません！」

彼女はうつむいたままでそういうと、するりと洋一から逃れて、アーケードの中を駆け去つていった。

あまりの早業に洋一はしばし、ぼうぜんとしていたが、彼のするどい頭脳はすでにうき始めていた。

・・・・・あれ・・・なんか声低くなかったか？それに肩もえらくがっしりとしてたよくな・・・・・

5秒で答えは出た。

・・・・・あつ！ 男！？

正解である。

どうも最近、水面下で秘かに増えてきてるという、女装の男、女装子というのに当たつたらしい。

夜のドキドキお散歩を愉しんでいる最中に偶然、洋一にぶつかってしまったようだ。

めざりしこものを見た氣分で、また歩き出そうとしたとき、洋一の胸・・・・・いや、正確には恥骨の奥あたりがピクリと震えた。

- - - - なんだ？

思わず足を止めてしまつと、今度は脳内で何かがドクドクと溢れ出してきたのを感じる。

それに同期するように、心臓がコトコトと音をたてはじめた。

- - - - び、どうしたってこりゃんだ、俺！？

訳がわからず田を見開いて立ち尽くした洋一の胸ポケットの中で、存在を誇示するよつにチャラリとキーが音をたてた。

それは、母が洋一に残してくれたマンションの部屋のキーだった。

午前3時。

洋一は震える手でキーを取り出すと、ガラスドアを開けて母のマンションのコンドランスに足を踏み入れた。

エレベーターで35階へと上ると、扉を開けて部屋に入る。

玄関は暗く冷えていた。

すぐそばにあるスイッチを押して明かりをつける。

短い廊下が、彼をいたずらにパツとあらわれた。

誰もいないのに、洋一はそつと足を忍ばせて進んでゆく。

2LDKのどこでもある小洒落た部屋だった。

これまでここへ何度もやってきていた。

別に母を愚ぶわけではなく、組や彼女たちに知られていない、独りつきりになれる場所だつたからだ。

また壁際にあるスイッチを押して照明をつけると、人が住んでいないことが不思議なくらい物がそろつた寝室が映し出された。母・凜はすべてを置いて、この部屋を出て行つたのだった。

理由は知らない。

実は大雑把で豪快なところがある凜なので、面倒で身一つで去つたのかもしれない。

そしてここで洋一は、全裸になつて鏡の前に立つてしまつたのだった。

長い回想は終わり、現在の洋一である。
自分がなんの目的でこんなことをしているのか、彼はわからなかつた。
あの女装子に突き当たつてから、憑かれたようにここへやってきて脱いでしまつたからだ。
ただ自分が今から何をしようとしているのかは、はつきりとわかつていた。
とまどつてしているのは、それを認めたくないだけなのだ。

その証拠に洋一の身体はまた動いて、ワードローブの下にある引き出しを開けている。

す一つと音も無く開かれたそこは、下着が咲き乱れるお花畠だった。

洋一の脳内に流れ込んでくる、妙な液の分泌量がグンッと跳ね上がった。

そして視線が己の股間へと向けられる。

そこにあるよつ洋一自身 - - - - 彼はそれを「暴れ坊主」と呼んでいた - - - - は、こんなにもドキドキしているのに、なぜかおとなしかつた。

- - - - なんだ？ 僕は心の病なのか！？

そうでもあるし、ないともいえよう。

とまじう心とは別に手は着々とまたうき始めて、黒いセクシーなランジェリー、俗に言う「ひもパン」を指がつかんで履いてしまう。そして絶対に合ひ訳がないと思っていた、母のブラが己の胸にピタリとおさまったとき、その動きは、もはや止めることは不可能なほど加速した。

無意識に田は、さきほどの女装子が着ていたよつなメイド服を探している。

しかもあるはずがないそれが、なぜかあつた。

・ · · · · か、かあさん · · · · あなたつていう人は · · · ·

息子の将来を見通していたかのようなチヨイスであった。

遠いフィンランドのある方角を洋一は思わず見上げてしまつたが、それはまったくの方向違ひだった。

フレアなスカートをはき、「入るかな？」と思いながら、そつとブラウスに手を通す。

なんなくそれは体にフィットした。

悪魔のしわざかと思うくらいの偶然だったが、親子なんだから他人より体型が近いのは当たり前なので、実は偶然でもなんでもない。ただ洋一は、それを神のしわざだと思った。

何種類も吊るされているウイッグの中から、長いストレートな黒髪のものを選んでかぶる。

完成した□の姿を洋一は、張り裂けそこなくらし鼓動している脳を押えながら、鏡に映してみた。

ない自分が中に見えて、洋一はおどろいた。

学生時代は剣道で鍛えぬき、今でも素振りをかかさない身体だったが、なぜか筋肉質に見えず、あくまで見た目は華奢でか細いことがこの現象に利を生んでいた。

この身体と顔のせいであらゆる精神的災害を被つてきたのに、皮肉にも今はこんなに自分の胸をときめかせている。

原因と結果である今とのギャップに、洋一は頭がクラクラした。

しばらくそのままして自分の姿を見ていたが、ふと今までの緊張がゆるみ、田を鏡からそらせた。

すると、その先にドレッサーが見えた。

とこりうか、すでに語尾が女性化している。

高校時代に、ビジュアルバンドのボーカルを、その時の彼女にムリヤリやらせていたので、化粧方法がわかつていたのがまた不幸だった。

母は仕込んだように化粧品もしつかり残していくつてくれていたので、あつという間に顔ができるが。

「あつ！」

自分の顔を見て、洋一は声をあげてしまった。

双子とはちょっとと言ひすぎだが、年の離れた姉妹くらい母に似た姿が鏡の中に見えたからだ。

さつきまであつた、ウイッグや服とのズレがかなりなくなつてきていた。

これは凶悪さをだすために細く剃りあげている眉の効果も大きかった。

洋一は、ヤクザになつて初めて、己の職業に感謝した。

適当にファンデーションをたたき、まつ毛をビューラーではねあげ、マスカラを塗つてアイライナーを引いただけなのに、目はぱっちりと大きく広がつて見え、つけまつ毛など必要ない。

しかもなぜかびしょびしょに濡れている瞳が妖艶なものを発散しており、アイシャドーすらいらないくらいだ。

元々細いフェイスラインがファンデでさらに引き締まり、顔を構成するパーティーフーつ一つをうまく演出している。

とどめの唇は、小さな薔薇が咲いているよつこ、輝きを放つていた。

「あ・・・・・・」

ついに洋一は、あまりに変貌をとげた己の姿に氣を失つてあおむけに倒れこんだ。

精神と肉体のコペルニクス的転換に耐え切れなくなつたようだつた。だが数秒でガバッと起き上がり、またドレッサーの方へと駆け寄ると、完成した自分の姿を見始めた。

いつしか窓の外には朝日が昇り、チュンチュンと雀の鳴く声がしていたが、洋一は夢中で気がつかなかつた。

「おはよおひるやれこめすー。」

「いへいへんわんっスー。」

事務所にはいると、洋一の効いた声や妙に甲高い声の合図が洋一を迎えた。

無言で挨拶を受けながら、個室となつている自分の執務室のドアを開けて中に入ると、どっかとドスクに陣取った。

結局あのあと、ゴミ回収車の夕焼け小焼けのメロディが聞こえてくるまで、女装して遊んでしまった。

そしてベッドに倒れこんでわいつまで寝ていたのだが、身体がまだだるい。

一晩で五回戦連続でエッチしたようなけだるさである。

一日一回は事務所に顔を出す決まりなのでしかたなくやつてきたが、すべに帰るつもりだった。

一時間ほどいじりで時間をつぶしてから出でたかったりで、また恥骨の辺りがソワソワしまじめた。

うつと思わずつめき声が出て、洋一はあわてて口元をやる。

「…………一晩だけって約束だったのに…………なんでもまたあそこへこいつとしてるんだ、俺？」

いつたい誰にそんな約束事をしたといつのだろ。。

しかもこのセリフの40%ぐらいは、すでに女性化している。

洋一の額を脂汗があおつたとき、ドアがゴンゴンと控えめにノックされた。

瞬時に極道モードへと移行して、低い声で応える。

「おう、はいれ！」

「失礼します」

組事務所に似合わぬ上品な声がして、男がひとり入ってきた。

洋一の付き人兼ボディガードの見習い組員・冴島さくじま 心しんだつた。

「兄貴、お茶をお持ちいたしました」

そういうつて冴島は、馥郁な香り漂うカップを、首も立てずに洋一の目の前に置いた。

「おっ、ありがとよ」

こう答えてカップに手をのばすと、綺麗な夕日の色をした液体を口にした。

「うまい・・・・・ やつぱシンの淹れてくれた紅茶は一味ちがう

目を閉じてそう洋一は思った。

シン。

二人だけの時、彼は冴島をそう呼ぶ。

そして冴島も洋一のことを「兄貴」と呼ぶ。

急いでまた断つておかねばならないが、この二人の間にその道の関係はない。

今までの洋一を見ているから「兄貴」という単語が妖しく聞こえてくるだけで、どちらもノーマルである。いくら言つてもみんな自分のことを「一代目」と呼ぶし、そしていくら頼んでも今までの付き人は紅茶を口く淹没してくれなかつたが、シンは違つ。

それに言葉遣いも丁寧で優しく、不必要に語尾のあたりに、ツとかスをつけないところも気に入つてゐる。

つまり洋一にはピッタリなのだが、ヤクザにはまったく向いていな

い男。

それがシンだった。

ちらりと横目で見ると、シンはお盆を小脇にかかえ、執事のよつてに謹厳な表情で、洋一の邪魔にならない位置に立つてゐる。そこは、彼が何かを言いつけようとしたとき、サッとすぐこ一歩で前に出てこれるという絶妙なポジションだ。

近いのに主の田の妨げにならない、あくまで影として立てる位置。いつたいこの男はどうじで、こんな技術を学んだといつのだろひ。

洋一がカップをソーサーに戻すと、すつと新聞が置かれる。

左手を動かすとすぐに煙草が手渡される。

だが、シンは火をつけはしない。

洋一が自分でつけることを好むからだ。

新聞から田を離さずに灰をポンポンしても、床を汚すことは決して無い。

そこには必ず灰皿があるからだ。

おまえはドラえもんか、と突つ込みたくなるほど、すぐに望みをかなえてくれる男。

そう、それが沢島 心であつた。

「シン、おまえうちに入つて何年になつた?」
今日も満足して、洋一は優しくそういった。

「三年になります、兄貴」

はつきりとはしているが、ドスを控えた慇懃な声でシンがこたえる。
「やうか・・・・・ ずいぶんともつ見習いも長いな
シンが少しうつむく。

その恥じ入る表情を見て、洋一の胸がチクッと痛んだ。

債権の取立てにいかせれば、相手に同情して自分の有り金を全部投げてくる。

博打を経営させれば、まつといつなギャンブルにしてしまって、利益が上がらない。

かといって女をだますことなどできつてないから、スケコマシでも食べていけない。

唯一シンができるヤクザらしことことえれば、ずっとやつてきた少林寺拳法でのゴロまきだが、自分から仕掛けるといつことができるない自衛隊のような専守防衛・局地戦闘タイプなので、やつぱりボディガードどまりだ。

まだ21だから今はいいとしても、これから先はヤクザではなくても生きていけない、そう洋一は考えている。

ゆくゆくは足を洗わせてカタギにしてしまおつ、そう彼は決めていたが、シンがいなくなつた後のことを思つて、つい決心が鈍くなるのだった。

洋一の考えを見透かしたように、シンが心のこもつた声でいつ。

「私は、兄貴のお世話をずっとこのままさせていただければ、うれしいです」

洋一の目がシンを見た。マジ顔だった。

「・・・・・すまんな」

「いえ、それが本心ですか・・・・・」
ええやつちやなあワレ、と一セ関西弁で洋一が心中、感動の嵐に包まれている中、シンは、はにかんだ笑みを浮かべて一礼して部屋を出て行つた。

ふ一つと鼻から息を抜くと、洋一はデスクの上に新聞を投げた。

「なんだかんだいってもヤクザだもんなあ。シンには似合わないよ

な・・・・・「

小さくつぶやくと、背中を椅子にあずけた。

本皮を張った椅子が、キュッと小気味よい音をたてて、彼を包み込

んだ。

彼女たち

ジリリリリーンー・ジリリリリーンー！

事務所をでたところで、洋一のケータイが古風な黒電話の着信音を奏で出した。

でると、彼女たちの一人である真子の声が聞こえてきた。

「洋ちゃんーん、今夜ヒマあ？」

「おお、あ・・・・・」

空いていると直すおつとしたとき、ちりつと母の部屋が脳裏をかすめ、ロゴもある。

「あーあああ・・・・・ あかんわ、仕事やねん」

「ちょっと！ その、あーの間と関西弁はなんなのよ」

甘つたるかつた真子の声のオクターブが下がる。

「いや、さつきテレビで観た芸人のしゃべりがうつうぢやつて

「・・・・・なんかあやしいね。洋ちゃんテレビきうじやん」

もつと声が低くなつた。

バカで能天気なキバ嬢なのに、いつもカソはなぜすぐ働くのか、と洋一は舌打ちしたくなる。

「ほかの女人とかじやないでしようね？」

「バツカ、ちげーよ。なんでそつなるわけ？」

「だつて、今日の洋ちゃんなんかいつもとちがう。かわつた気がする」

「だから、なにそれ？」

「カン。でもなんかゼッタイかわつた！ 好きな子できたの？」

意味はまったく違うのだが、変わつたといつうところは的を得ている。洋一自身は決して認めないだろ？

「…………今から洋一ちゃんの部屋いく。帰るまでずっと待ってるか

「…………今から洋一の耳に、殺気が送り込まれた。

うつ、とつめき声がでそうになつて、洋一はあわててケータイを遠ざけた。

顔と身体は超一流だが、頭の中がお花畠の真子は、とても嫉妬深く、一度うたがいをもつたことは全て明らかにしなければ、延々とそれを言い続けるのである。

なので、ゼヒとも今は会いたくなかった。

…………や、ヤバい！ 部屋に帰れないとなると、あの部屋にずっといなきゃいけなくなる

そうなると、もうこひら側へは一度と戻つてこれない気がして、洋一はぞくつとした。

それにつまでもシンの送迎を断るわけにこかないから、マンションの存在も組にバレてしまう。まだ初秋だというのに、まるでサウナに入つてこむよつに汗がドップと吹き出てシャツを張り付かせた。

「あははは。まったくなにいつてんだよ、おまえ。ひざーつてば力なく笑いながら、洋一は考えた。

とりあえず今夜は部屋に帰つて真子の誤解をとこうか。

しかし、妙にカンだけはいいあの娘は、自分の変化の理由を察知してしまうかもしない。

そうなると破滅だ。

「わ、わかった！ ちょい仕事まで時間あつから、今から会おうが

「…………」

「なんだよ、まだうたがつてんの？ しょがねえなあ……じゅ、

これから信じられるようにしてやるよ」「ねえ

これから……の後に続くセリフに艶をもたせて、洋一はケータイに吹き込んだ。

力技で行く気だ。

真子は野生児だけにエッチが好きだった。

「あ……じゃあいまからいつものホテルのラウンジいくね」「真子の声が一瞬で甘いものに戻った。

成功である。

洋一はニヤリと笑うとガッツポーズを決めた。

「おお、早くこよー。あと、シャワーは浴びず、な

「イヤーン、洋ちゃんのエッチ！」

エッチはてめえだろうが、と心中で突っ込んでおいてから、洋一は一言二言はなしてパチンとケータイを閉じた。

「兄貴、お車出しましょつか？」

急に耳元でシンの声がして、さすがの洋一もびっくりして、ヒックと悲鳴をあげて飛びのいた。

「申し訳ありません……おどろかせてしまつて」

「し、シン……おまえ気配消しそぎだつて！」

「失礼しました。お電話の邪魔かと思つて控えておりましたので」シンはそういうて軽く頭をさげた。どことなくいつもより懇懃無礼な感じがした。

その仕草をみて洋一はハツとした。

……こいつ、電話の相手が真子つてことも、その内容もわかつてやがる！

そう気がつくと、わすがに気味が悪くなつた。

「車を回してきますから、少しあ待ちください」

くるりと優雅にターンして、足早に去つてゆくシンの背中を見つめながら洋一は、「きっとシンは忍者の末裔かなんかに違いない」そう真剣に思つのだった。

洋一のテクニックをもつてしても、真子を納得させるのに3時間もかかるつてしまつた。

セックスは嫌いではなかつたが、同年代の男より数多くこなしてきてし、また様々なシチュエーションもお試し済みなので、最近ではあまり高かぶらなくなつていた。

疲れた顔でホテルを出た洋一は、シンの運転するジャガーに乗り込むと、ふうーっと息を天井へと吹きあげた。

「兄貴、どちらまで？」

ハンドルを握つて、まつすぐに背を伸ばして座つていたシンが、そつたずねてくる。

洋一は考えた。

息も絶え絶えで、ベッドに横になつたまま真子が言つたセリフがよみがえる。

「今夜、洋ちゃんとい泊まる。しばらく部屋にいるから」

彼女がそう言つたといつことば、洋一の作戦はミッションコンプとはいつていないらし。

今夜部屋に戻らなかつたら、真子は更に疑いをつのらせるだらう。

彼女一筋、と言つわけではまつたくない洋一だが、長年染み付いたクセで、女性を泣かせるのは嫌いだつた。

まあ、本人は気がついていないだけで、河原の石の数ほど泣かせきてしているのだが。

いつも悪氣の無い加害者と言つてのタチのよくな男は、さらに考

える。

…………そもそもなんで俺は、自分の部屋に帰りたくないって
イライラしてんだ?

答えはすでにでている。

目をそらせたい事実ではあったが、母の部屋に行きたいのだ。
もう一つ突っ込んで言えば、女装して遊びたいのだ。

そこまで考えて、恥ずかしさで顔がボワンと赤くなり、また恥骨の
あたりもムズムズとしてきはじめた。

洋一はうつむくと、爪を噛んでそれに耐えた。

「…………兄貴? どうかなさいましたか?」

ずっと無言でいる洋一を心配したシンが声をかけるが、耳には全然
とどいてはいない。

行きたい。だけど行けない。

出でている一つの結論の狭間で、洋一の心は揺れにゆれている。

…………兄貴、真子さんとにかくあったのですが……

あんなに苦しそうなお顔になってしまわれて

洋一の揺れがシンにも乗り移ったのか、兄貴の事ならなんでもわかる、そう強く思っていた心が揺らぎ始めて、彼も苦渋に満ちた顔になる。

シンはあるいは真子以上に洋一にたずねたかったが、いらぬことを
聞いて兄貴を苦しめてはならぬと、じつと耐えて待つた。

この男は昭和以前に、しかも女性として生まれてくれれば良き妻、そ
して良き母として立派であつただる。だが現実は、男でヤクザ見習いなのだ。

そんなシンの存在などすっかり忘れて、じりじりと洋一は考え込んでいたが、やがて理性が勝つて、毅然と顔を上げて命令した。

「シン、部屋に帰る。車を出せ」

「わかりました」

車体を沈みこませず、するりとジャガーよすべり出すと、ホテルのエントランスから車道へと走り出していった。

「兄貴、降りずにしばらくお待ちください」

洋一の住むマンションの駐車場でジャガーゲ止まり、外へ出ようとしたら、シンがそういった。

「なんだ、妙な野郎でもいるのか？」

ドンパチなど数年に一度あるかないかの、平和な街の暴力団だ。ヒットマンなどいるはずもなかつたが、いちおう職業柄そういうてみた。

だが本当は、少しヤクザらしいことを口にしてみたかっただけである。

シンは何もこたえず、自分の脣に人差し指を立てて洋一に黙つているようにジースチュアすると、さつとジャガーゲ降りて猫のよつに階段へと消えてしまつた。

いぶかしく思いながら煙草をふかしていると、すぐに帰つて洋一にさせやいた。

「真子さんと綾乃ねえさんが部屋の前で言い争つてます。どうやら鉢合わせしてしまつたようで。いま上がられると不測の事態になるかと思いますので、いじは離れまじょう」

この街一番の高級クラブ「セブンシーズ」のNO1ホステス綾乃の名前を聞いて、洋一がひるむ。

「あいつは物分りはいいが、浮氣は許さないやつだ。血の雨が降る……」

「どうしましょう。水音さまのところでもまいりましょうか?」大学の講師をしている水音の名前に洋一は、今度は首を横に振る。「いや、あいつは今イグアナの研究で忙しいはずだ。邪魔しちゃならねえ」

「…………さすがです、兄貴」

彼女同士を激突させておいて、さすがもなにもないはずなのに、シンはそういって洋一をほめた。

「それではどこか部屋でもとつましょうか?」

そういって洋一の顔を見たシンが、あつとおどろいた。

「…………あ、兄貴が笑つてらつしゃる!」

洋一自身も気がついていなかつたし、またシン以外の者ではわからないくらいだつたが、微妙に彼は笑っていた。あの部屋に行く理由ができた喜びが、隠し切れないものとなつて出てしまつたのだ。

おどろきを表情に出さぬよつて苦心しながら、シンは洋一の言葉を待つた。

「おまえはここで帰れ」

「はつ?」

「俺を降ろして帰れ」

「兄貴…………」

逃げずに一人の誤解を解こうとしている、そう思ったシンは、やつ

ぱり兄貴は立派なお人だと感動する。

「それではどうかご無事で。何かありましたらすぐに連絡をください。事後処理用の道具を用意して事務所で待機していますから」「洋一のことになるとおかしくなるこの男は、物騒なことをさらりと言つと、きつちりゅうの礼をしてからジャガーに乗つて去つていった。

車が完全に視界から消えた後、さらに10分待つてから通りに出て確認して、洋一は足早に自分のマンションから立ち去つた。

その夜、母のマンションに来た洋一は、昨日とは別のメイド服を着て鏡の前に立っていた。

昨夜は黒。

そして今夜は黒を基調に白いコプロンが強調された、本格英國風ハウスメイドであった。

「…………母さん…………なぜあなたはこんな物を持つてたんですか？」

10年前といえば、東京は秋葉原でよしやくメイドブームが隆盛し始めた頃だらう。

なのに凛はこの地方都市に住みながら、何ゆえこんな代物を、またどうで手に入れたといふのだらう。

自分の知らなかつた母の一面に洋一は、マリワナ海溝をダイブしてのぞいたような戦慄を感じて身を震わせた。

だが、何者も恐れる必要の無いヤグザの彼を、それ以上にビビりさせていたのは、内なる自分からのメッセージであった。

「…………出でやえ…………そのままの格好でお外を散歩しちゃえつ！」

内なる者は、彼の脳内にダイレクトにそう語りかける。
あの日から自分の中に魔性が宿つてしまつた、そう洋一は感じていた。

そいつが耳をふさごとも、耳をつぶしても、ずっとそれをかけてくるのだ。

…………絶対にバレないつてつ。夜だし、コスもメイクもカン

ペキだし！

なぜか内なる魔性の声は、うら若い女性の声であった。

それはさておき。

あくまで自分基準だつたが、割とよく似合つているのもまた事実。それに、なにより外へ出たいという欲望は、檻から出された獣のように凶暴で押しとじめようが無い。

理性と言うか細い手綱が切れるのは、もはや時間の問題であった。洋一はなんとか気を静めようと、キッチンにあるバー・カウンターから無造作に酒瓶を選んでつかみ取ると、そのまま口をつけ一気に飲んだ。

そしてその瞬間に豪快に吐き出した。

洋一の口は、まるで農家のスプリンクラーによる、アルコールを霧と化して部屋中に撒き散らす。

「ゴホ、グホ、ゲホ、グハハハッ」

あらゆる擬音を並べながら、咳き込んで、床に膝をついて苦しむ。手放されて転がった酒瓶のラベルには、「スピリタス」と書いてある。

それはアルコール度数9.6。と言つウォッカであった。

もはや酒ではないと思われるそれを、吐き出したとは言え、ボトル半分は一度胃の中に納めてしまっている。

おまけに今日は、シンの淹れてくれた紅茶以外の物は何一つ口にしてはいない。

すぐに強烈な酔いが全身に回ってきた。

洋一は腰が抜けてしまい、そのまま床にへたりこんだ。

「あ・・・あはははははは」

女装の快感にアルコールの多幸感が加わって、彼はへラへラと笑い出す。

お出かけストップ作戦はこれで成功かと思われた。

-----この調子で酔いつぶれてしまえ！

メイド洋一は、あらゆる酒を棚から出してきてグラスに注ぐと、とつかえひつかえ飲み始めた。

バー・ボン、ラム、ウイスキー。焼酎に泡盛、紹興酒。凜のアル・コール・ギャラリーは、場末のバーなら軽くしのいでしまうくらいのラインナップだった。

そういうある内に、やがてアイライナーでパキッと決まっていた目がどう一ひと緩み、シャドウを塗ったまぶたが下がつてくる。そうなると、今まで涼しげだった瞳が、なんだかエロティックなものへと変化してきたように洋一には思えてきた。

なんとこの男は、小さな手鏡を手に、己の顔を肴に酒を飲んでいるのである。

わずか一日という短い期間で、洋一は完全無欠の変態さんと化してしまっていた。

「う・うふふふ・あははは」
よかれと思つてやつたアル・コールで撃沈作戦は、別の効果を表し始めていた。

ドキドキを落ち着けはしたが、同時に理性をも眠らせてしまつたのだ。

なぜなら、笑い声がすでに女性化してきている。

「行つちやえーつ！」

心中でつぶやいたつもりが声に出ていた。
もう完全に染まってしまっている。

「行つちやえーつ！」

内なる魔性の声も、言葉となつて口から出た。

洋一はフラフラと立ち上がると、揺れながら玄関へと歩き、豪奢な彫刻の施されたシューズボックスを開いた。

すらりと並ぶ靴の中から、茶色い編み上げブーツを取り出して足に突っ込んだ。

お約束のようにそれはピタリと彼の足に収まる。

もう縛るものなどどこにも無い。

洋一はドアを勢いよく開けると、羽ばたくような足取りで、部屋を出て行ってしまった。

午前2時の夜の街。

繁華街から少しだけ離れた通りを、ぼくぼくと行くメイドさんが一人。

左手にシェリーの瓶を持ち、楽しげにハミングしながら、満面の笑顔で歩いている。

夜もふけたとはいえ、そこは街の中心地。人っ子一人いないわけではない。

薄暗いネオンの下を、大手を振つて行進するメイドの姿は人目を惹いた。

ある者はヒューッと口笛を吹いて感嘆し、またある人はおおつと酒臭いため息をついた、

そんな人々の視線などお構いなしで、かつぽかつぽとブーツを鳴らして、紅椿一家の二代目・メイド洋一が行く。

「うふふ、楽しいわあ、愉快だわあ、幸せだわあ」

まったく客觀性のない感想を口にしながら、にこにこと笑い続けて

いる。

そつやつて裏通りを歩くうち、「ふと脇を見ると、震えながら店の残りの酒を探している、老いたホームレスの姿が目に映った。

「おじいさん、これを差し上げましょつ」

笑顔で洋一は手に持つていたショリーを押し付けると、おじいく老人を後にしてまた歩き出す。

すると今度は、小さな居酒屋の店先で、数人の若者が一人のおじさんをボコっている光景が見えた。

「ダメですよー、そんなに大勢で蹴つたりしちゃ。加減しなさい、かげん」

「あア？ なんだよねえちゃん。ヤつちまうぞコラフー！」

凄む男の顔面に綺麗な前蹴りが入り、何かが碎けるイヤな音がした。

「うわあ！ なにこいつ！？」「ああ・・・見えた、黒いの・・・・・

残つていた二人にも、それぞれ回し蹴りと裏拳がご馳走された。

「う、早い！ ・・・・・」「おおつ！ 今度はヒラヒラが・・・・・

その言葉を最後に、二人は崩れ落ちた。

ボコられて丸まつていた会社員Aさん（45歳・課長）は、笑顔で三人を秒殺してしまったメイドさんを畳然とした顔で見ていたが、彼女がくるりとこちらを向いたので、本能のままに逃走した。

「メリメリつていつたねー、あの子の顔・・・うふふ

恐い事を可愛くいつてからまた歩き出す。

今度は妖しいネオンが点るバーの前に、原型がわからなくなるくらいまで化粧をした少女たちがいた。

職業上のクセで、じーっと目を見ながら通り過ぎようとした洋一の背中に、剣呑な声が降りかかった。

「ちょい待てよおまえ！ なにジロジロ見てんだよ」

振り返つて蹴りの軸足を決めたところで、彼の足が止まった。

「セフヒミーストな性格がよみがえって、女性に蹴りを入れる」とを阻止したらしい。

少し考えてから、ひょいと服の両袖をつまんだ。

一瞬の内に、闇にキラリと光る細長い刃物が一本あらわれた。それを見てひるむ少女たちの前で、小さく洋一の左手が動いた。並んで立つ少女たちの間を縫つて、真後ろにあつたバーのサインホールに刃物が突き立つ。

「こ、こいつなんかヤバい！」

笑顔で超絶テクを見せたメイドに恐れをなし、彼女たちはワーッと逃げ出した。

可愛く手を振つてそれを見送つてから、サインポールに刺さつた刃物を抜いて袖の中にしまつと、洋一はまた歩き出した。

「フンフンフーン あはははっ」

楽しくって笑いが止まらない。こんな気分を味わうのは初めてのことだ。

危険なメイドの洋一は、そう思しながら手を振つてトコトコと歩いてゆく。

その後姿を、路地裏を横切つていた黒い猫が、不思議そうな目で見ていた。

いつの間にか裏通りを出て、車の走る国道脇の歩道を洋一は歩いていた。

走る車のライトで照らされて、さつきよりその姿がよく見える。

ひたすら破滅への道を行く彼の頭の中には、今の自分に対する違和

感や見られる」とへの恐怖は微塵も無い。

そうやって歩いている内に、後ろの方からハデなバイクや車に乗つた、地方にしか生息しない人たちが現れた。

ゆっくりと蛇行しながら走る彼らの内の一人が、洋一の姿を田に捉えた。

「あ、メイドがいるー」「うひょーーー！ロードバイクのやねりつー」「おねーさーん！俺らと遊んでー」

欲望丸出しのセリフに、洋一が笑顔で手を振つて答える。

その仕草が、彼らの中に暗いものを沸き起させた。

キーッとブレー キ音を響かせてバイクと車が止まり、全員が洋一の方へと輪を作つてやつてくる。

「メイドさーん、ダメだよ、こんな夜中にそんなかつこいつで歩いてちやー

「やうそ、へんな」とわれちまつよー

おまえらが今からやるんだらうが、と突つ込みたくななくらい分かりやすいセリフだ。

なのに、なんのことだかわからないといつ顔でしばらく洋一は考えていたが、やがて大きくなづくと、サッと男たちの間を駆け抜けた。

「あ、逃がすな！」

振り返つて追いかけようとした男たちの前で洋一は立ち止まると、道に止めてあつたバイクや車のキーを片つ端から抜いて、「えいつ！」と叫んでビルの谷間へと放り投げた。

男たちは、えつ？という顔をしていたが、やがてそれぞれキレた顔つきになつて飛びかかってきた。

右手で一発、左手で連續一発で三人を沈めると、ぐるりと身をひるがえして洋一は逃げだす。

長年の経験で、多勢を相手にするやり方を、忠実に身体は実行していた。

- - - - 残りは6人ねつ

だが心中のセリフは女性のままだ。

初めて履いたヒールの高いブーツにもかかわらず、洋一の足は軽く男たちを引き離す。

ちらつと振り返つて、少し彼らがバラけてきたのを確認すると、すればやくターンして、先頭の男のみぞおちに手のひらを叩き込んだ。次の男は木刀を持っていた。

上から襲つてきたそれをステップでかわし、ブーツで踏んづけてから膝蹴りを頸にお見舞いする。

木刀があればもう無敵だった。

「あつはははは！」

甲高い声で笑いながら洋一が、うつと手を動かすたびに、男たちは一人づつ倒れてゆき、誰も自分に近づけない。

恥骨の奥の痺れに熱い何かが加わり、そこから背筋へと駆け上がりてくる、電流のような気持よさに脳が痺痺した。

アドレナリンと女性ホルモンが全身を駆けめぐり、不思議なエクスタシーをもたらして洋一を震えさせた。

歩道には、いつの間にか何人もの野次馬が集まり、口々に何かを言い交わしながら自分を見ている。

ドックン。

大きな音をたてて何かが流れ込んでくるのを感じた。

それは、眩暈がしそうなほどの快感の液体。

- - - - あ・・ なんかきそつ、これ・・・・・

その時、辺りに無粋な男の声が響いた。

「コラーッ！ うちの事務所の前でなにをわいどんじや！」
叫び声がした後ろのビルの中から、数人の男が駆け下りてくるのが
見えた。

「あつ、シン！」

その中の一人を見て、洋一は正気に戻った。
逃げ回っている内に、どうやら自分の組の前で暴れていたらしい。
木刀を投げ捨てるど、洋一はダーッと走つて野次馬の中に突つ込んだ。

「すっげえ！ メイドさん、カッコイイ！」「おねえちゃんやるなあ」「顔見せて！」

見物人の中をうつむいて駆ける彼の背中に、そんな様々な声が降りかかる。

「すっかり戻つて深く後悔したが、すでに遅い。男にすっかり

スカートをひるがえして夜の街を駆け去る洋一は知らなかつたが、
今夜、彼は伝説の扉を開けてしまつていたのだつた。

どこかで電話が鳴っている。

…………うるせー、誰か出ろよ早く！

眠りの中を浮上しながら、洋一はそう思つてつなるが、電話の音は止まらない。

…………誰もいないのか？ 真子、綾乃、水音、出でくれ。 .
…………シン。おいシン、出ろ！ .

そこで飛び起きた。身体中が痛い。

どうやら床の上で寝てしまつたらしかつた。

座り込んでぼんやりと首を回した先に鏡があつて、その中をのぞいた時、洋一はカツと目を見開いた。

長い黒髪に薔薇色のリップ。

昨日の記憶が音をたてて流れ込んでくる。

起き抜けだったが、頭はすばやく事態を把握していた。

ケータイを探し出すと、ボタンを押して耳に当てる。

「兄貴、おはようございます。今どちらですか？」

爽やかなシンの声が鼓膜に流れ込み、昨夜の彼とのニアミスがまざまざとよみがえってきて、洋一は顔を真っ赤にした。

「…………兄貴？ 具合でも悪いんですか？ すぐに迎えに行きますから、今いる場所を…………」

「大丈夫だ、くるな！」

思わずそう叫んでしまつてから、うつと言葉に詰まる。

いらぬことを口走つてしまつたと、死ぬほど後悔したがもう遅い。はたしてシンは、己の兄貴の異変を的確に察知して、声をひそめて聞いてくる。

「…………わかりました。大丈夫です、誰にも言こませんから。で、新しい彼女のところですか？」

「ま、まあ そんなとこだ」

「では秘密にしておきますので場所を……」

「それはダメだ！」

「えつ？」

「あ、いや…………この人はカタギの娘さんでな、ヤクザの俺が迷惑をかけるわけにはいかねえんだ」

「…………兄貴。真子さんや綾乃姉さんも一応カタギですよ。水音さんなんか大学の先生ですし」

「バカヤロウ！事情があるんだよ、事情が」

「ですが、二代目の居場所も知らないでは、組に顔向けできません」

「そう言われてもこっちも困る。」

墓穴掘りまくりだったが、なんとか誤魔化そつと洋一は必死になつた。

だが、シンの執事的とも言えるカンの方が早かつた。

「兄貴…………彼女とかではなくて、何か妙なことになつてるんじやないですか？」

彼が重要な事をたずねてくる時の、控えてはいるがうむを言わせない強い口調である。

「え、妙なことって？」

「病気とか」

おしい。半分くらい当たつている。だがその言葉に洋一は蒼ざめた。なんと鋭い男なんだと舌を巻くが、ここは認めるわけには行かない。

「いや、元気元気。ちょっと二日酔いだけど

「何か心配事でもあるんじゃないですか？」

「ないつてそれ。ほら、仕事も順調でトラブルとかもないし」

「そうじゃなくって。プライベートとかで」

「充実してるよ。それ、なんていうの、リア充ってやつ? あれだし」「それにしては声が微妙に震えておられますがない」

「おまえは刑事か、と叫びたいくらいのカンと追及だったが、じつと洋一は耐えた。

「…………シンには使いたくなかったが…………しかたがねえ、一代田パワーで行くしかない」

「ドスの効いた声で言った。」

「おう、シン。てめえ一代田の言ひ方いうたがつてんのか? 四の五のいわすに言ひこと聞けや!」

「…………申し訳ありません」

「今から事務所に行く。おまえはそこで待つて」

「わかりました、と悲しそうな声でこたえたシンに胸がチクリと痛んだが、こればっかりはしかたがない。」

洋一はケータイを切ると、バスルームに飛び込んでメイクを落としてシャワーを浴び、出かける支度をしてマンションを後にした。

すっかり落ちてしまった太陽に背を照らされながら、洋一が事務所に入つていったのは午後5時だった。

シンと顔を合わせるのは気まずかったが、そこは彼も付き人。

しかも超一流なので、表面上はいつもと変わらずに洋一に対して接してくれる。

今の肩書きである組長代行として、一、二、三の案件の報告を受けて指示を出し終えると、もう洋一の仕事はなくなってしまった。責任はあるが、はつきり言つてメチャクチャ樂勝のお仕事内容である。

まあこのポジションに上がるまでが大変なのが、親の七光りでスポンとなんの苦労も無くそこに収まった洋一は、そのありがたみにまったく気づいていない。

普通はそこからでも所属している広域組織での上を目指すので、何かと政治的な気苦労が絶えないのだが、上昇志向皆無でまたその必要性も理解していないから、今のところ遊んでこようなものであった。

しかし彼はその生活に満足していなかつた。

前も、そしてあの時まで、ずっと。

だが女装子とぶつかってしまった、あの夜からちがいはじめた。

本皮のデスクチェアに深く身を沈め、あいに手をあてて、アンニコイな表情で洋一は考え出した。

-----まさかあんな世界があつたとは、まったく知らなかつたぜ

男である時とはまったく違う、見られることでの快感。

女性の物を身に付けることでの開放感。

そして、女装した自分と暴力との不思議な一致感。

今までは置かれた状況の為にしかたなく、どちらかと言えば嫌々暴力をふるつていたのだが、昨夜は違つた。

躊躇い無く放つた前蹴りで碎いた鼻骨の感触を思い出し、洋一はうつとりとした。

また恥骨の奥がピクリピクリと震え始め、その快感によだれが出そうになつて、はつと口を閉じる。

変態を音速で通り越して、異常者として覚醒してしまったのだろうか、この男は。

その一方で洋一のクレバーな部分が、自分を冷静に分析する。

-----でも、ついに女装で外に出てしまった。てことは、次は誰かとその姿で会いたくなるんじゃ・・・・・・

恐怖が身体を突きぬけ、うわっと叫び声になつて口を手で押える。心臓が16ペースで踊り始めた。

そう、この欲望はエスカレートしてゆく定めなのだ。

一般人なら茨の道くらいだらうが、極道稼業の洋一にとって、それは破滅への階段である。

しかもその段数は、絞首台へと上がる13階段より短いと思われた。じんわりと嫌な汗が脇の下を伝づ。

しかしその一方で、ビビればビビるほど、女装に対する欲望と快感を求める声が高まってくる。

内なる魔性がふわりとささやきかけた。

-----仕事もう終わったんでしょう？ 行こうよこれから。ほら、すぐに。まだ暗くなつてないからドッキドキもんだよー！ 洋一の表情が、上半分がヤクザフェイス、下半分が笑顔という、複雑怪奇なものへと変化した。

-----はああああ、もあたまんないっ！
がっくりと首を垂れた。

やはり普通ではなくなつていたのだろう。

自分をじつと見つめている視線に、洋一はまったく気がついていない。

二代目の影としてひつそりと壁の花と化しながら、シンはずつといふ兄貴のことを観察していた。

----- 兄貴には絶対に何か困っていることがある！

忠実な付き人は今、そう確信した。

シンの心の中にある、エキセントリックスイッチがパチンと入る。今の洋一と同等、いや、それ以上に危険かもしれない男が、ついに起動してしまったのだった。

その日、玲は通つてゐる女子高で奇妙な噂を耳にした。

放課後、帰り支度をして、自分が記事を書いているタウン誌のネタ集めに街へとでようと考えていたら、まだ居残つておしゃべりしていたクラスメイトの話が聞こえてきた。

また彼氏とかの話だらうとは思つたが、新聞部平部員……玲の記者本能がつが実は部長を影であやつる真の支配者……玲の記者本能がつい発動して、聞き耳をたてた。

「あたし昨夜、すんごいの見ちゃつたあ」

「なによ、またしようもないことでしょ？」

「ちがうつてば。あのね、戦闘メイド見たの、あたし

「はあ？ それってアニメかなんかの話？」

「だーかーら、ちがうつて！ リアルのお話。あたしメイコたちと夜中までカラオケいつて、そんで2時くらいだつたかなあ、アーケードの裏を通つて帰つてたわけ。そしたら西商業のヤン姉たちがいてさ。うわヤバって思つてたら、先に絡まれてる人がいて。それがメイドさんだつたんだけどね。まきこまれんのイヤだつたから、あたしかくれて観てたの。そしてらなにやつたのかわかんないんだけど、西商のヤツらワーッて逃げ出していなくなつちやつたの」

「それって、メイドさんがなんかやつたわけ？」

「うーん、そこまではわかんない。でね、あたしなんかおもしろそうつて思つて、そのメイドさんの後をつけたの。そしたらその子が国道に出たところで、ハルオさんとのチームが走つてきて

「うわっ、あのタチ悪い人！」

「そそつ。たぶんあれはあの子さうつてなんかする氣だつたんじやないかなあ。みんなバイク止めておりてきて、メイドさんかこまれちゃつたの」

聞かせている子は、鼻息も荒く顔を近づけて、話の続きをせがんだ。

「そしたらメイドさんが暴れだして大乱闘！めちゃくちゃ強いんだって、それが。たぶん空手か拳法だねあれば。で、ハルオさんたち秒殺！」

「なにそれ、ほんとに女の子なの？」

「うん。女装子であれだけきれいな子はいないとおもうから、女の子だと思つ。で、全員やつつけちゃつて、そのうちにヤつちゃんまで出てきて大騒ぎよ」

「え、ヤクザも返り討ち？」

「ううん、さすがにそれはないよ。ヤつちゃん出でたとこでメイドさん逃げちゃつておしまい」

「ふーん・・・まあ作り話にしては面白かったわ。漫画に描いたらまた見せて」

話を聞いていた子は、ニヤニヤと笑つて立上がりると、教室の出口の方へと歩き出した。

「なによー、それいちがうつて、マジ話なんだつてばー！」

しゃべっていた子も、怒りながらそれについてゆく。

肩越しに顔をむけて一人を見送つて、玲は考えた。

「ほんとかな？ たしかあの子、漫画描いてるつていつてたからネタなのかも。でもダメ元で今夜さぐつてみるかなつ机の上に置いていたスポーツバッグを拾い上げると、玲は軽い足取りで教室を後にした。

午後10時。

自宅を出た玲は、タウン誌のスポンサーになつてゐる店や、顔見知りの店へ挨拶がてら入つていつては、ネタになりそつなものを作色した。

高校に入つてすぐ、遊んでいたところでタウン誌の記者と知り合つて、雑誌作りの真似事をするよになつた。

そして高校三年の今、玲はすでにタウン誌の有力助つ入ライターとして、編集長の覚えも高かつた。この仕事を手伝いだして知り合つた人たちも、活潑で妙に人懐っこいこの娘のことを、子ども扱いせずにかまつてやり、たさいな街の情報でも教えたりした。

行動的乙女である玲の夜は短い。肩までの明るい茶色の髪を夜風に流しながら、玲はきびきびと足取りでその健康的な身体を運んでゆく。あちこちに顔を出す内に、あつといふ間に日付が変わつて、玲は少しあわてた。

-----やばっ！ そろそろアーケードの方にいかなきや

広告を出してくれると約束してくれた居酒屋の大将にお礼を言つと、玲は急いで表に出た。

アーケードへと早足で歩きながら、さつきスポーツバーのマスターに聞いた話を思い出していた。

そこマスターが、野次馬としてメイドさんを日撃したと言つたのだ。

「いやあ、凄かつたよ玲ちゃん、あれ。華奢な子でね。外人かハーフかと思つたくらい綺麗な顔してんのに、木刀持つて男をメッタメタにしちやつてさあ。あれつて絶対に剣道の有段者だよ。どこのイ

メプレの店に勤めてるのかなあ。行つてみたいなあ、俺
思い出す内に、玲の瞳が段々と光を帯びてきた。
- - - - 空手に拳法。おまけに剣道ねえ・・・・・ おもしろ
いじゃ ないつ !

この平和な地方都市では、10年に一度あるかないかというネタだ。
話がもし本当なら、今それをタウン誌で取り上げれば、何か新しい
波を起こせるかもしれない。

自分が、すごく大きなものの鍵を握っているような気分になつて、
玲は背中がゾクゾクとしてくるのを感じた。

肩から下げるバッグの中に、デジカメとボイスレコーダーが入つて
いるのを確認してから、玲は足に力を込めて急いで歩き始めた。

午前1時。

人気の絶えた地下街に、コツコツとピンヒールの音が響き渡る。

ホームレスの辰さんは、その夜めぼしい得物にありつけず、空腹を抱えてダンボールハウスの中で寝ていた。

「あ、せめて酒が見つかってりや、ちつとは飢えもしのげるつていうのによオ・・・・・・」

茶色から黒へと変色しかかっている毛布を巻きつけて、辰さんがブルッと身を震わせたその時、前を通り過ぎよつとしていた足音が止まつた。

すわつホームレス狩りの若者かと身構えると、ガバッと入り口のダンボールが剥ぎ取られ、何かがそこから投げ入れられた。

「うわあ！」と声をあげて頭を抱える辰さんの身体に、何やら軽い物がポコポコと当たつて下に落ちる。

次に、ガチャンとガラスの触れ合づ音をたてて、大きなビニール袋が床に置かれた。

「寒くなつてきましたね。皆さんでこれ分けて召し上がってください。少しさは温まると思います。どうか気を落とさず。きっと楽しいことがありますよ・・・・・・」

地下街の照明が邪魔して姿は判らないが、そんな女性の声がした。

まだ固まつている辰さんの耳に、またピンヒールが道を叩く音が聞こえ始め、遠ざかってゆく。

そつと目を開けて、自分の身体に当たつた物を手にとつてみると、

それはあたりめの袋。

暗闇で見えなかつたが周りには、乾物屋かと言いたいくらい、乾き糸おつまみの袋が散乱しており、入り口には酒瓶が詰まつた袋があつたのだ。

なんだかわけがわからなかつたが、危険は無いと悟つた辰さんが、おつかなびっくりダンボールハウスから顔を出して外をのぞく。

煌々とした光に照らされながら、背筋を伸ばして去つて行く、派手な後姿が見えた。

真紅のシルク生地に、鮮やかな刺繡で大きな龍が描かれた、全身をタイトに包むチャイナドレス。

左手には、ロンリコ・ラムの瓶が握られている。

そう、言わずと知れた、洋一の姿であった。

やっぱり女装して街へと出てきてしまったのだ。

彼は始め、己の足を殴つてあの部屋に行へのを止めようとした。だが、ただ痛かつただけで、足は普通に母のマンショングアをくぐつていた。

今度は、手を押えて女装を止めようとした。

しかし、気が抜けて鼻をほじつた瞬間に、女装が始まつてしまつた。せめて部屋の中で我慢しようと試みたが、鏡に映る自分の姿に満足して、ついつかり傍にあつた酒を飲んでしまつて、全ては終わつた。

----- そうだ！ホームレスのおじさんたちにプレゼントを持つていいてあげよつ！

そんなムチャムチャな理由をつけて、洋一はそのままの姿で外へと飛び出したのだった。

差し入れが、あたりめや酒だったのは、かけらほど残つていた男と

しての本能がチョイスさせたものかもしれない。

アルコールで解放された魔性によつて、洋一は地下道を通り、地上へと続く階段を登り始めた。

その足取りに、ためらいや戸惑いは微塵も無い。

女装お散歩を開始してまだ二夜目だといつのに、ピンヒールを危うげなく履きこなし、声まで女性化しているこの男はいったいなんなのだ。

正体不明の曲をハミングしながら大手を振つて - - - - 今夜はスリットの深いチャイナなので足取りは静々とだつたが - - - 中華乙女・洋一は地上へと舞い降りた。

白檀の扇子を取り出し、パタパタと顔をあおぐ。

どこへ行こうかと考えているようだ。

正面はアーケードの西の入り口。

左は飲み屋街へと続く道で、右は繁華街を取り巻いている国道だ。やがて行く道が決まったのか、優雅に扇子を仕舞つと、洋一は右に足を向けた。

艶めかしく揺れる腰と、スリットから見え隠れする白い足が、暗闇の中へと消えていった。

玲はアーケード北口にいた。

ダンスの練習や弾き語りでうたう人々が両脇に並ぶ中を、彼女は左右に目を配りながら歩いてゆく。

キヤツチの黒服をかわし、横に並んで道をふさぐ酔っ払いの大学生を睨み倒しながら、玲はどんどん南へと進んでいった。

やがて信号が現れて、一番人通りに多いアーケードが終わった。

信号待ちをしながら考える。

やつぱ人の少ないアーケード方かな？それともこの周りの裏通りかな？

考えている内にパッとシグナルが青に変わった。

くるつとり。ターンすると、玲は右へと足を向ける。

繁華街を取り囲む国道と平行して通っているアーケードの方ではなく、さきほど歩いてきた周辺をまた探るつもりのようだ。

タクシーが縦列駐車するのを脇に眺めながら、玲は肩にかけたバッグを揺すりあげると足を早めた。

洋一は国道脇の歩道を悠々と進んでいた。

この国道は、さきほど玲が渡らなかつた交差点から、彼が初めて出てきた地下道へと続いて通るアーケードと平行してはしつてている。

昨夜、洋一が暴れた国道とつながつていて、今はちょうど真逆の位置を彼は歩いていた。

この辺りはデパートなどの大型店が立ち並ぶ区画で、深夜の人通りは少ない。

それでも彼の姿は人目を惹き、醉客から好奇の視線がそそがれた。

自分を見つめる者に、嫣然とした微笑で洋一はこたえている。

その笑顔を見て、ある男は鼻を伸ばし、ある若者は実らぬ恋に落ち、あるおとうさんは、恍惚のあまり家族土産の寿司の折り詰めを道におっことしてばら撒いた。

それを見て、洋一の快感ボルテージはどんどんと上がつてゆく。

- - - - - きつもちいしい - - - - -

まさか自分を探している不図き者がいるとは夢にも思わない彼は、こみ上げてくる心地よさを隠しきれずに、甘い吐息をつきながらゆっくりと歩いてゆく。

だから、普段の洋一ならすぐに感づいていたはずの視線を察知しそこなつっていた。

ちょうど彼の100メートル後方。

奇しくも洋一の組が経営する高利回り金融の看板の陰から、熱い視線でこちらをうかがつている男がいた。

「まさか兄貴がこんなことになつていたとは・・・・・・」
頬を赤らめながら洋一の背中を見ていたのは、口調が示すとおり、忠実な付き人、冴島 心であつた。

シンの尾行は、洋一が事務所を出たところからもう始まつていた。彼の追跡がまつたくバレていなければ、洋一の脳容量の99%を女装が占めている証である。

シンは始め、知らないマンションへと入つてゆく洋一を見て、やはり新しい彼女のところだったかと思ったが、やがて出てきた兄貴の姿を見て、何事にも動じない彼が持つていたカフュラテのカップをボトリと取り落とした。

ちなみにシンは酒も好きだったが、甘い物はもっと好きだった。ドクドクと流れ出す甘つたるい香りに囲まれながら、シンは己の目

を疑い、何度も何度もこすつて確認した。そのために田が真っ赤になつた。

----- 間違いない、兄貴だ・・・・ 姿形が変わつても、俺が兄貴を見まちがつはずがない

そう確認すると共に、あまりに恐ろしい現実に、シンは身体が震えてくるのを感じた。

だが、全てはちゃんと見廻けてからと考え直し、ヒタヒタと洋一の後をつけってきたのだつた。

そうやつてついてゆく内に、シンは自分の身体の異常を感じてふと考えた。

----- おや、まだ身体が震えている。もう落ち着いているはずなのになぜ？

そういえば心臓もまだドキドキしていた。頬もなんだか熱い。

しばらく変調を不審に思つていたが、今は兄貴のことと、また意識を前に向けたとき、洋一の行く手を数人の影がふさいだのが目に入つた。

「いた！こいつよハルちゃん、あたしらおどしたの」

ある国の原住民をおもわせるマイクをした、やたらと薄着の女の子が洋一を指差して叫んだ。

「牛島さん、こいつス！俺ら襲つてきた女は」

ハルちゃんと呼ばれた男が、かたわらに立つ大柄な男にそつわわやいた。

街灯の明かりからはずれていて、その男の姿はよく見えない。

脅してきたのは彼女の方だし、襲ってきたのは「」いつだったが、あの夜のことは快感とシンの顔以外よく覚えていない洋一は、小首をかしげて考え込んだ。

が、やっぱり思い出せないので、ロンリコをぐいっと一口飲む。そんな彼の後方では、危険を察知したシンがいつでも飛び出せるよう身構えている。

牛島という男が、のそりと暗がりから姿を現した。

身長168cmの洋一より頭一つ、いや一つ半は高い。

短く刈った髪をツンツンに立たせて、四角くえらの張った顔にはいかつい髪がたくわえてあった。

「」つい身体と相まつて、見るからに腕力に自信あり、といった風だ。

どうやら昨日、洋一がやってしまったチームのボスキャラらしい。凄むわけではないが、やる気満々という空氣を漂わせて牛島は洋一をにらんだ。

だが彼は、薄笑いを頬に浮かべながら、扇子を使って涼しげな顔をしている。

辺りを不穏な気が取り囲み、暴力の予感がひしひしと高まってきた時、とつぜん牛島の殺気が消えた。

よく見ると、目は厳しままだが大きく見開かれていて、口が〇の字を作っている。

おどろいている表情だった。

そのうち、「」つい身体がブルブルと震え始めた。

手下のハルちゃんとその彼女も牛島の異変に気づき、「なんでもやってしまわないの?」といつ非難の目をむける。

むふーんと荒く鼻息を噴いて、牛島が口を開いた。

声は渋いバリトンであった。

「か、かわいい」

「えつ？」

ハルちゃんと原住民女子が、同時に疑問の声をあげる。

「つ、つきあつてください、ぼくと」

「マジ?」

また一人が同時に声をあげた。

彼らの思惑と180°。違う展開についてゆけなことうだ。

「ひとめ惚れなんです、お願ひしますー」

もう一人は何も言わない。だがこのセリフには上機嫌でいた洋一もシリフに戻った。

野獣のような男にいきなりカミングアウトされても-----たとえイケメンだったとしても同じだらうが-----気持ち悪いだけでコメントしようがない。

牛島が一步前に出る。さすがの洋一には半歩トがらずをえない。

「ど、ドライブにきませんか?」

「・・・・・・イヤ」

「じゃ、飲みにでも」

「・・・・・・ムリ」

「それではちよこつとだけお茶でも」

「・・・・・・てかウザい」

洋一の精神攻撃にも屈せず、牛島は前へ前へとつめてくる。

殴り飛ばすわけにもゆかずに下がる洋一。

だがその均衡も、牛島の熱愛がついに臨界に達して俄に破れた。
彼は猛然と洋一に飛び掛った。

牛島はその時見た。

チヤイガナレスのスリットが壊れ、細く美しい脚線を描く足が高々と上へとあがられるのと、その足の奥にある物を。

牛島の顔に喜びがよぎった刹那、彼の右頬にビンヒールがめり込んだ。

直綫から鋭く真横に飛び必殺の回し蹴りだ
あわれ牛島くんもアスファルトに接吻かと思

彼はやはり体格通りの猛者であった。

٦١

牛島の手が、まるで愛おしいものに触れるようにそっと足首を捕ら

その感触に、ヒツと洋一が悲鳴をあげる。

なんだかよくわからないが兄貴のピンチと、シンが歩道へと駆け出

掴まれた足を支点にして躍り上がると、空いていた片足から牛島の

「変形真空飛び膝蹴り！」

おもわず技の名を口にして立ち止まるシン。
モロに決まつた膝に牛島が鼻血を噴出すると、その隙に掴まれた足を
はずして洋一は駆け出す。

「牛島さん大丈夫っスか！」

そう言って近寄ってきたハルちゃんをなぜか裏拳で殴り飛ばして、
牛島は叫んだ。

「逃がさん！ おまえは俺の女だあ！」

その言葉にかつとなつたシンが、牛島に走り寄ると思いつきり拳を
顎にたたきつけた。

これにはたまらず、牛島は仰向けに倒れたが、そいつにはもうかま
わず、シンはマイ兄貴の後を追つて走る。
だがすでに洋一の姿は消えており、シンはあせつて闇雲に路地裏へ
と踏み込んでいった。

ポツンとそこに残された原住民風女子は、ぶつ倒れている彼氏と牛
島を見下ろしながら、何が起つたのか理解できずに呆然とするの
だった。

洋一は闇雲に夜の街中を駆けた。

その左手には、あれだけの事態の後なのに、まだロンリコ・ラムの酒瓶が握られている。

どれほど走つただろう。

もう追つてはこれないだろうと立ち止まるが、荒い息を整えつつ、れいきの出来事をファイードバックした。

「うはあ、久々に男に迫られてビビッたあ！ でも会つて10秒で好きではないよねえ、歌の文句やマンガじゃないんだじ

幼少期から青年期までに自分に言ひ寄つてきた男どもと牛島がオーバーラップして、洋一はうづうと顔をしかめた。

それ以上おもいだすのは辞めこして、ロンリコを「じへじへ」と飲み干す。

煙草が吸いたくなつてきた。

だが全て部屋に置いてきてしまつていたし、さすがにロンビニへ買ひに行くのは、わずかに残つてゐる理性が止めてと言つてゐる。

「明日からはバッグ持つて出よつと」

この男、もうためらい無く女装お出かけを口課にしようとしている。人生のがけつぶちに爪先立ちしてゐることを、洋一はすつかり忘れてしまつていた。

しかたがない。煙草もないし、今夜はもう帰るかと彼は歩き出した。すぐにタクシーがたくさん並んでゐる、アーケード同士をつなぐ交差点へと出た。

この道をまつすぐ西へ行けば、左手にさつと出てきた地下街の入り

口がある。

洋一は空になつた酒瓶を信号脇にあるコンビニのダストポットに投げ込むと、カツカツとヒールを鳴らして西へとまた歩き出した。

その時・・・・・

「みつけたあ！」

野太い声に振り返ると、顔面を血に染めた牛島くんが、ハアハア肩で息をしながらこちらを指差しているのが見えた。

恋する男のアンテナは、捕捉不可能と思われた追跡をやり遂げさせてしまつたらしい。

絶句する洋一に、牛島はゆっくりと近づいてくる。

道行く車のライトに照らされて、怪しい光を帯びた彼の瞳が見て取れた。

口を横にイーッと広げて洋一は固まつていたが、牛島が間合いに入つたのを見てさつと車道に飛び出ると、走る車の間を抜けて通りを渡り、北の方角へと逃走を開始する。

「絶対に逃がさん！」

牛島も巨体を車道へと躍らせて追跡してきた。

突然飛び出してきた大男に、走っていた車が急ブレーキを踏む音が辺りに響き渡る。

洋一にはとにかく駆けた。

いつもの彼なら、相手が何者であろうと降りかかってきた火の粉はためらわずに実力行使で払いのけるのだが、なぜか女性化している時は、敵意を持つ者以外への暴力には抑止力がかかるらしい。ホームレスへの差し入れと合わさつて、これは女装状態での一現象と言えるだろう。

追跡を確認しようと洋一が一瞬うしろを振り向いた時、横合いから

ひょこっと女の子が出てきて、モロに一人がぶつかる。

ヒールを軸に洋一はかかしのよう回つて吹っ飛び、女の子はどうしんと尻餅をついた。

「痛つ！」

「ごめんなさい！」

シネマの早回しのように素早く洋一は立ち上がり、女の子の出できた方へと身をひるがえして走り去る。こつちもなにか言おうとしたが、相手がいなくなってしまったので、女の子がデニムのスカートのすそを払いながら立ち上がった時、大男が目の前にあらわれ、ビクッとすくみあがつた。

男はフンゴフンゴと息を吐きながら叫ぶ。

「どつちいった？ チヤイナの人どつちいった？」

「あ、あつち・・・・・・」

その迫力に負けて、つい女の子が去つていった方向を指差すと、スチームのような鼻息を吐いて、大男はそつちにむかつて駆け出した。数秒、女の子は唖然としていたが、すぐに目が輝きを帯びたかともうつと、大男の後を追つて走り出した。

・・・・・ いつもメイドとは限らない。さつきのが噂の人だ！

記者のカンがそう告げている。

カモシカのようにしなやかな動きで大男に追いつこうとしている女の子。

もうおわかりの通り、女子高生ライターの玲であった。

薄暗い路地裏。

アスファルトの上に、規則正しく鳴り渡るピンヒールの音。それにつづく荒い男の息と、軽いスニーカーの足音。頭上で輝く様々な原色の見本市のようなネオンサインが、走る真紅のチャイナドレスをストロボで映し出す。

次に熊、そして少女。もとい、洋一、牛島、玲だ。三人の姿は、まるでスクラップステイックな映画のシーンのようだ。

チャイナドレスの背中に牛島が叫ぶ。

「お、お名前を！」「イヤッ！」「じゃ、住んでるとこを」「もつ」とイヤッ！

「メディを演じながら駆ける一人の後ろでは、真剣な表情をしてバツグに手を差し入れる玲の姿がある。

「あつ」

突然、洋一の姿が闇に沈んだかとおもつと、アスファルトの上を転がつた。

彼の俊足に耐え切れず、ヒールが折れてバランスを崩したのだ。肩を押えて立ち上がった洋一の目の前に、両手を上げて牛島が立ちふさがる。

「さあ行きましょう・・・・・今すぐ・・・・・」

あらぬ妄想を鼻から噴出しながら、牛島は歩み寄つてくる。その姿に、洋一の防御センサーが彼を敵と認識した。ふたたび高まるバイオレンスの予感。

だが、その緊迫を打ち破る声が牛島の背後でした。

「そここの男じいてー、影になつてて『らうないー』

「えつ」

玲の叫びに牛島がおもわず振り返った時、洋一の身体が路面ストレス
しまで沈んだかとおもふと、弾のように前へと突進した。

玲の目には洋一の姿が消えたように見えた。
だが洋一は、瞬時に牛島の懷に飛び込むと、みぞおちに強烈な掌底
突きを放つたのだ。

拳での打撃と違つて、掌はインパクトを広く深く内臓へと波及する。
牛島の目がくるりと裏返ると、ズーンと音をたてて沈み、洋一の姿
が玲の前にあらわになつた。

----- チヤンスッ！

構えていたデジカメのシャッターが切られ、フラッシュが辺りを白
く染める。

しかし、カメラが捉えたのは、真紅の背中だけだった。

シャッターより早く、鮮やかターンで身をひるがえして駆け出す、
チヤイナの女。

玲は1チャンス1ヒットに失敗して、強く唇をかみ締めてその姿を
見送る。

そんな彼女の背後10メートルの位置で、壁に身を隠して一部始終
を見ていたシンがつぶやく。

「玲・・・・なんでおまえが・・・・・・」

湿りを感じる路地裏で、残された三人はそれぞれの姿で、影となつ
て動きを止めたのだった。

牛島騒動からじばりくたつたある日。

いつも通りに事務所にやつてきた洋一は、デスクに陣取つてゆつたりとシンの淹れてくれた紅茶を楽しんでいた。

あの騒動の翌日、持病の痔が急に悪化した父・義隆の代参として神戸に行つていた洋一は、ひさしひりに女装ができるとワクワクしている。

ひさしひりといつてもわずか一週間なのだが。

----- 今夜はなに着よつかなあ。メイド、チャイナときてるから、次も定番の和服？ いやでも、和服は髪をアップにしなきや決まんないし・・・・・・

そんなことを考へてゐる田の前で、お盆を片手に、シンが沈鬱な表情でたたずんでいる。

「おうシン、どした。なんか話でもあんのか？」

「いえ・・・・・別にありません。失礼します」

表情を消してシンは、いつもの丁寧な礼をして部屋を出て行つた。

「なんだあいつ・・・・・妙な顔してたな」

そういうぶかしがる洋一が、ティータイムを再開しようとカップに目を向けたとき、デスクの先、ちょうど入り口との間の床に紙が一枚落ちているのが見えた。

何気なく立ちあがつて手にとつてみると、それは毎週この街で発行されているタウン情報誌だつた。

シンが落としていたのかと思い、興味がでて中に田を通してみると、ほとんどが店舗のPRやクーポン券で占められてゐる、どこにでもあるパンフレット風の冊子であつた。

紅茶を口に運びながら、何の気なしに後のページの占いなどを見ていたが、つまらないのでもう一度パラパラとめくつて捨てようとしたとき、大きなおり文句とスナップ写真が田に留まり広げてみた。

その途端、洋一の口から、ダラダラと紅茶がこぼれだした。

「WANTED！

ワルと戦う 戰闘コスプレお

姉様！

大きなゴシック体でそう書かれた下には、スリットから白い足を覗かせて駆け去る、真紅のチャイナドレス姿の自分がいた。

そのまた下に小さな活字で、洋一がこれまでに起こしてきた事柄が克明に記事として書いてあり、末尾の言葉はこう結ばれていた。

「「」の女性の情報を編集部では求めています。それでなうわさでもOK！電話・FAX・メール等でお送りください」

ジノリのティーカップを持つ手が震えてこるのを感じながら、洋一は口中の紅茶を全部吐き出してそこに立ち去った。

「玲ちゃんす、ごよ反響が！こんなになるとは思わなかつたな俺」「ねつ、あたしの言った通りでしょ？ 絶対にこれ当たるつて」

送られてきたお姉様情報のメールの数を見て、玲は得意そうに胸をそらせると、タウン情報の記者にそういった。

彼女の口論見どおり、平和な街の退屈に飽きていた人々から、たくさんの戦闘お姉様に対する有象無象の情報が送られてきた。その内容はどれも玲の集めた情報の域を出ないものだつたが、自分の記事が大きな反響を呼んで、彼女の心はワクワクとはずんでいた。

「続報も頼むよ、玲ちゃん」

記者は笑顔でそういうと、またかかつてきたお姉様情報の電話へと対応しはじめた。

「はい、まかせといて！」

そう元気よくこたえたとき、ポケットの中でケータイが振動した。見ると兄からの着信である。

ピッピボタンを押してでた。

「兄ちゃんめずらしいね、自分からかけてくるなんて」

「・・・玲、ひさしぶりだな」

彼女の耳に爽やかなアルトの声が聞こえてきた。

「どしたの、なんかあつた？」

「いや、これから会えないか？」

「うん、いいけど・・・どしたの？兄ちゃんから電話で会おうなんて、なんか不思議

「会つたときに話す。今どこにいる？」

「タウン情報の編集部。兄ちゃんには言つてなかつたけど、あたしライターやつてんだよ。さつきもさあ・・・」

「知つてゐる。じゃあ今からいとこひで待つてるから」

玲の言葉を途中でさえぎると、兄は編集部近くにある喫茶店の場所を彼女に伝えてから電話を切つた。

いつもと違う兄の態度に玲は首をかしげたが、まあ会えばわかるよ

ねと、編集部の入つてゐるビルを出ると、軽い足取りで歩き出した。

待ち合わせの店へと行きながら、兄にも戦闘お姉様のことを聞いてみようと考えていたとき、ふと気がついた。

-----あれ？ あたしがライターやってるの知ってるっていってたけど、なんでかな？

玲の親でも知らないことを、家を出でいる兄が知つていたというのがおかしかつたが、人大つぴらに言えない職業だからどこができるのかもと軽く思いなおして、早足で歩道を歩き出した。

その夜、洋一は母のマンションでうなだれて考え込んでいた。

・・・・・ どう考へてもマズいよね、また女装で街に出るのは・・・

ため息を一つついて、テキーラのグラスを傾ける。
だが、今夜も彼はバツチリ女装していた。

青と白を基調に、胸元に豪華にフリルをあしらつたブラウス。 パニエで大きく膨らませたフレアースカート。

首には艶脂色のリボンタイを締めて、不思議の国のアリス風メイドであった。

だがそれだけではない。

今夜の彼の頭の上には、なんとネコ耳カチューシャが装着されていたのだ。

そのなんとも言えぬ困った空気を醸し出している姿は、もはや女装などと簡単にくくれないほど複雑怪奇で、まさに「変態!」としか形容しようがない。

トドメはそばに置かれてある、手持ちの小さなトートバッグだった。中味は煙草とケータイ。

「出る気満々やないかい、ワレ!」と読者諸兄は突っ込まれるだろうが、まずは彼の言い訳も聞いてやつて欲しい。

心の病だかなんだかわからないが、ここで女装お出かけを辞めてしまつと、ストレスで稼業の方にも影響が出てきて、きっととんでもないヘマをやらかしてしまうだろ?。

とこうか、そもそもまず出てゆくことを止めるのが不可能に近い。

しかしこれもまた不思議だが、なぜか俺はタウン誌にマークされている。

だから目立つ格好でのお出かけはもう辞めよ。」

地味な〇しがホステスっぽい格好でならマークもかわせると思つから、これからはそれで我慢する」とこじよつ。

「メント不能なムチャクチャな理論だったが、いちおつ結論りしきものが出て、洋一は立ち上がるときッと顔を上げて叫んだ。

「よし、だから今夜は最後のメイドナイトだ！」

バッグを手にすると、洋一は玄関へと小走りで駆け、用意しておいた黒い厚底のシューズに足を通して、ドアを勢いよく開けて外へと飛び出していく。

まるつきつ正常な判断ができなくなつてゐる洋一から少し時間を戻そつ。

太陽が沈みかけ、街が紫色に染まる夕刻。

待ち合わせの喫茶店へと着いた玲は、目立たない奥まつたボックス席に座つてゐる兄の姿を見つけて手を振つた。

軽くうなづいて答える兄。

もつお氣づきかとおもつが、それは紅椿一家一代目付きのシンだつた。

「わあ、兄ちゃんの顔みんのひさしぶりだあ。元気だつた？」

にこやかに笑いながら玲はシンの前の席に座ると、注文をとりにきたボーキにミルクティーをオーダーする。

「ああ元気だ。すまないな、急に呼び出したりして」

「ううん、別にいいけど。それよりどしたの？あたしに話なんて初めてじやん」

無邪気に話しかけてくる妹から目をはずすと、シンは言ひよじんで黙り込む。

静寂が訪れ、しばらくは店内を流れる小粋なジャズだけが、二人の間に漂っていた。

ミルクティーが届くまでたつぷりと黙り込んだあと、おもむろにシンは切り出した。

「今週のタウン誌の記事を書いたのは玲か？」

なぜ知っているのかと玲はいぶかしながら、「べつにミルクティーを飲むと、軽くうなづいた。

「うん、そうだけど。なんで兄ちゃん知つてんの？」

「あの記事に載つていた人をこれからも探すのか？」

質問に質問が返ってきた。

いつもの兄とは違つ、性急な物言いにとまどいながら玲が答える。

「うん。さつきも編集部に顔出したらすんごい反響でね、電話やメールもバンバン来てて。記者の人にも続きよろしくって言われちやつてさ……」

「それ、やめてくれないか？」

言葉をさえぎられて、おどろいて玲はシンの顔を見つめる。

玲に対して優しい笑みを絶やさなかつたシンが、真剣な目をして自分を見ている。

その表情で気がついた。

「あの人つて兄ちゃんの知つてる人なんだ……」

今度はシンがおどろいた顔になり、息を飲んで皿を手に取る。

「兄ちゃんの彼女が好きな人なの？」

玲の問いかけに、兄の肩が小さく揺れた。

「やっぱそうなんだ。それで……」

「ちがう! あの人はそんなのじゃない」

おさえた声音だったが、玲がビクンとしてしまったほど強烈に否定の声だった。

またうつむいてしまった兄の姿を見つめながら、玲は思つ。

「ふーん……でも兄ちゃん。ちがうっていつても

その仕草じゃバレバレだよ

まあその辺はあまり刺激しないようにじつと冷静な判断を下すと、玲は話を進めだした。

「それはいいとして。知ってる人なのはほんとでしょ? で、なにか事情があつて正体がバレると困る人」

そういうたとき、一瞬だけれどシンの口元がイーッとゆがんだのを玲は見逃さなかつた。

片手をつぶつて、少し上目遣いに兄を観察しながら、カップに口をつける。

「兄ちゃん言いたくないんだろうけど、その事情を話してくれないとこいつも困るわけ。これでもちゃんとお金もらって記事書いてるの、あたし。だから高校生だからといっていかげんな仕事はできないの。兄ちゃんやつちゃんだから、仕事のケジメつてよくわかつてるよね?」

理詰めできた妹の言葉に、シンは額に汗が浮かんでくるのを感じた。
「…………」「、こればっかりは言えない…………でも話さない」と、この強情な妹は絶対に兄責を追うのを止めないだろう
パラドクスな問題に、シンは苦渋に満ちた顔をした。

そんな兄の姿を、玲はまるで実験を見守る科学者のような目で見ながら、また話し始める。

「それにライターとして聞くわけだから、秘守義務ははちゃんと守るし、もちろん興味本位とかはいっさいなしよ。その人の生活に影響が出そしたら、記者の人に話して止めることもできるし」

はつとシンが顔をあげる。

その目に希望の光を見て取つて、あと一押しと、玲は一気にたたみかけた。

「それに・・・・・・」

「そ、それに？」

「兄ちゃんあたしが信用できないわけ？兄ちゃんヤクザになつてあたしやみんなに迷惑かけたけど、あたしが兄ちゃんに迷惑かけたことある？」

「ない・・・・・・」

「なら話しなさい一悪こよひでひましないから」

肉親の情と兄の罪に訴えた、本職のヤクザも顔負けの、アメとムチの使い分けが絶妙な交渉であつた。

シンより妹の方がその道にむいているのかもしれない。

証拠の凶器を田の前に置かれた容疑者のよつこ、がつくじとシンは肩を落としてうなだれた。

玲が田でもう一度うながすと、兄は一袋田の女装のことをぽつぽつと語り始めたのだった。

そして時はまた戻つて……

マンションのエントランスから出てきた洋一を見て、シンはうつとうめいた。

「あ、兄貴！ それはいつたいどんなお姿で……！？」
「アリス風メイドね。よっぽど自信ないと決まんない服だからあんまし一般的じゃないけど。てか、あのネコ耳が意味不明」

「そうじゃなくて！ なんであんなお姿に……それにちやんとあの冊子を落として警告したのになぜ」

「知らないよそんなの。好きだからでしょ、れつと。ああいつのは自分じゃ止めらんないもんなの！ それより兄ちゃん、いくよ」
すっかり兄妹の立場が逆転していたが、そのことに気づかないシンは、玲の後について洋一の追跡を開始した。

その後、洗いざらい打ち明けた兄に妹は言った。

「ふーん、そういう事情ならこっちも考えるけど……で
も兄ちゃん。あたしが記事にしなくっても、このままあの人があの格好で出歩いてたら、絶対に噂はおつきくなるよ。もう火はついたやつてるわけだし。その二代目だっけ？ その人にちゃんと話して辞めさせる方が先じゃない？」

「それはできない！ つらい稼業の息抜きで楽しんでらっしゃる行為を舎弟に見られて説教されたなんてことになつたら、もう兄貴のメ

ンツは丸つぶれ。俺も組に、いやあの人のおそばにいられなくなつてしまふ」

「へえ、いろいろとめんぢいのねえ、ヤっちゃんも「火をつけたのは自分なのに、まるつきり同情していない口調で玲はそういうて、冷えてしまつたミルクティーをまずそつに飲む。

そして、うーんと顔を上にあげて考え出した。

「こつちから言えないとなると…………そだ！あたしがある人に言つてのはどう？」

「えつ」

「もう、にぶいなあ！だから、あたしがあの人の決定的な瞬間を捉えてから、出てつてはなすわけ。それならあの人も兄ちゃんもダメージ少ないつしょ？だつてあたし赤の他人だし」

「そ、そうかなあ？」

「じゃ、ほかにいい方法ある？」

黙り込んだシンを見て、玲は言つたのだ。

「決まりね。今夜から兄ちゃんとあたしであの人を尾行よつ。今度は必ずチャンスつかんでやる！」

「おい。それなんか意味ちがつてないか？」

兄の言葉はもう妹には届いていなかつた。

そして兄妹は今夜、洋一の後をつけているのだ。

「また街に出て行かれるのだろうか」

「うーん、そだとしたらそつと一キテるわね、あの人」

そう話す二人の前、100メートルほど先で、チラリチラリと青白いスカートが揺れている。

その光景に「クツ」とつばを飲み込むシンを見て、玲は目をイヤそうに細めていった。

「てか兄ちゃん。ほんとはあの人のこと好きなんじゃないんでしょうね？」

「バカ！ 兄貴は男だぞ」

「ただけど・・・・なんか兄ちゃんの反応がおかしいから」

「俺はノーマルだ。その気はない」

玲は、ふーんとまだ納得せずうなりをあげていたが、洋一の姿が角を曲がつて消えたので、いそいで闇を詰めて走った。

ぼくぼくとアリスマメイド洋一は夜道を歩いてゆく。

その足は繁華街とは別の方へと進んでいて、少しだけシンは安心した。

やがて洋一は、街の中心から少しはずれた市民公園へとたどり着いた。入り口の逆の字の標のあいだを通りて、彼の姿は闇の中へと消えてゆく。

深夜の公園なので人影はない。

ここでは騒動など起るはずがないとシンが胸をなでおろしたとき、洋一の目の前にバッと黒い影が現れたのが見えた。

何か一言二言はなす声が聞こえてきて、シンが前に出ようとしたら、

影がものすごい勢いで真横に吹っ飛んで倒れた。

それを見て唖然としたが、当の洋一は、もう後ろも見ずに鼻歌をうたいながら歩き出している。

二人にはよく見えなかつたのだが、黒い影は痴漢で、隠れて獲物を待つていたところ、おいしそうなメイドさんが現れたのでこれはラッキーと飛びついて、したたかに洋一に殴られたのだつた。

凶器は、左手に持つたテキーラの瓶であつた。

なんだかよくわからないが、シンはなぜか用意していたロープで男を縛り上げて転がし、玲が手帳に「この人変質者でーす！」と書いたページを破つて背中に貼り付けた。

その作業を一分とかけずに終わらせて、また尾行を開始する。

アリス洋一が公園を出てゆくまでの一時間の間にその被害者は三人にもおび、深夜の公園でのコスプレ姿がいかに危険であるかを知らしめた。

どいつも一撃で仕留められていたので、玲が出てゆく暇も無かつた。

洋一は公園を後にすると、トコトコと歩いて、24時間営業の大きなリカーショップへと入つていつた。

どうやら酒が切れたらしい。

面が割れているシンは出入り口の影に待機して、玲が中に入った。彼女は大胆にも、たくさんの酒が並ぶ棚を一つ一つ吟味している洋一の後ろまで近寄つていつて観察した。

-----メイクがイマイチね。明かりの真下でよく見たら、男つてわかっちゃうかも

しかしども30男でしかもヤクザには見えないな、などと思ひながら、ゆっくりと後ろを通り過ぎた。

チラッとカウンターの方を見ると、レジに立っている男が、好色そ
うな顔をほこりばせてメイドさんを見ているのがわかり、ムツとす
る。

----- なんでかわいい女の子のあたじじやなくて、女装男の
方を見るかな、もう！ メイド服に騙されちゃって・・・・こ
れだから男はバカね

世の男性にはあまりに酷い感想をつぶやくと、玲はまた洋一の方を
見た。

彼はバー・ボンの銘酒・ブッカーズを手にしてレジへむかっていた。
そして支払いを済ませて店を出てゆく。
店員の顔は最後までほころんだままで、まったく洋一の正体には気
がついていないようだった。

外に出た洋一は、店の駐車所の奥の暗がりまで歩き、フーンスにもたれかかると、ブッカーズの封を切つてグビリと一口あおつた。そして酒瓶を下に置き、バッグから煙草を取り出し火をつけた。

口から吐き出された白い煙が、漂うそばからすぐ消えてゆく。なにやら納得がいかないといった表情をしていた。

- - - - うーん・・・・ やつぱ公園とか店はつまんないなあ
煙草を口に運びながら洋一は考える。
そして、やはり街を歩きたい、そう思った。

洋一は、盛り場のあの猥雑な空気が好きだった。

そこにはたくさん種類の店があり、またそれ以上に様々な人々がいる。

その一つが醸し出す妙にウキウキとした、けれどもどこか少しやうげな香りがする、夜の街が彼は好きだった。

だが、そこへこの姿でゆくことはもうできない。

そこまで思つて寂しそうにしつむいた時、洋一の頭の中で魔性の声がした。

- - - - またお酒買ってホームレスの人たちに持つていってあげよう。それだけやって帰ればきっと大丈夫だつて
甘い甘い誘惑の声であった。

じんわりと快感がこみ上げてきて、洋一は自分の身体を抱いた。もうダメだった。

しばらくせうして震えていたが、やがて店へと取つて返して大量の酒とツマミをかい込むと、洋一は地下街への道を颯爽と歩き始めたのだった。

地下街に天使が舞い降りた。

ふいにやつてきた美しいメイドに、そこに住む人たちはおどろいたが、彼女が前に酒とあたりめを投げ込んで消え去つたチャイナの女だと気づいた辰さんが、仲間にそう説明したので、みんな警戒をといて集まってきた。

冷たい夜風に震える人々に惜しみなくアルコールを配り、嫌がることなく輪の中に入つて話を聞くメイドさんに、彼らは神性を感じた。

「こないだはありがとよ、お姉ちゃん。今夜もこんなに差し入れ持つてきてくれて」

「ねえちゃん色が白くって彫が深いけどハーフかなんかか？」

「いける口だねえ、ほらドンドン飲んで」

突然はじまつた深夜の宴の中、人々は口々にメイドさんに話しかけ、彼女もまたそれに笑顔でこたえた。

口数が少なく、その正体もわからないけれど、事情があつてここに住む自分たちにちゃんと接してくれるメイドさんと、みな好意を抱いている様子だった。

冷たい世間の風もその周りを避けてゆくような温かい宴はずつと続くかにみえたが、終わりも突然やつてきた。

「おお・つー今夜はメイドさんがいるよオ

あざけるような声が宴の輪の外でした。

声のした方を見ると、5人の若者が手にバットや木刀といった物騒な物をさげて、じゅらじゅらを向いてニヤニヤと笑っていた。

先頭に立っている長い金髪の男が、手のひらに特殊警棒をピタピタと叩きつけながらいった。

「かわいいねーメイドさん。俺らといつしょにこの臭いのいじめて遊ばない?」

男たちの発する臭の空氣におびえて、ホームレスたちは後ずさりしながら固まつてゆく。

「街のおそうじ屋さんさ、俺らは。こいつやつて!汚いのを! かたづけてさ!」

シャーツと音をたてて警棒を伸ばすと、男はゆがんだ笑い声をあげながら、ダンボールハウスを一つづつ潰してゆく。

「うわああー!」

一人のホームレスが恐怖に耐え切れなくなり逃げ出した。

木刀を持った男がすばやく走り、地上へと続く階段に逃げたその影に斬りかかる。

鈍い音がして、悲鳴が暗い闇から響いてきた。

警棒の先をメイドの顔にむけて、金髪がいう。

「それともなに？ あんたも偽善者でこいつら守る方なわけ？」

男がうつむいたメイドの顔をあげようとした時、冷えた声がした。

「・・・臭いねえ」

「あア？ そりや臭いさ、ここは」

そう答えた男をあざける高い笑い声がメイドの口から飛び出す。そしてよく光る田で男を見据えて言つた。

「いくら香水振りまいて隠しても、消せないくらいバカなガキの匂いがして臭いっていつてんのさ」

彼女の押し殺した声に、男たちの笑いが止まる。

メイドはゆっくつと立ち上がつた。

「ハツ！おもしろい」と叫うね、おねーさん。じゃ、おじさんたちの後で遊んだげるよ。俺、気が強い女が泣くとこ見んの好きなんだあ」

鼻で笑いながら言った金髪の言葉に、後ろの男たちがククッと笑つた時、メイドの左手に光るもののが現れたかとおもふと鋭く横になぎ払われ、同時に右手が閃いた。

金髪のズボンの股間が切り裂かれ、バットを持っていた男の顔面に焼酎の瓶が突き刺さる。

次の瞬間にはもうメイドの身体は金髪の懷へと飛び込み、人差し指と中指を「」の字に曲げた拳が鼻下の急所に炸裂した。

吹っ飛んで倒れた一人にかまわず、木刀男が走りこんできて、メイドの頭を狙つて上段から打ち下ろす。

逆らわず、かえつて進んでそれをかわして相手のみぞおちを狙う彼女に、手元に鞭のように引き寄せられた木刀が、鋭い突きとなつてまた襲いかかる。

あきらかに剣の心得があり、しかも暴力に慣れた動きだ。首だけでそれを避けて、さつとメイドは後ろへ飛んだ。

さつきまで彼女がいた空間に、チエーンが叩きつけられる。連携のとれた動きに、残る男たちもかなりの手練れだと思われた。

木刀が正面を、チエーンが右後ろ斜め。そして真後ろをナイフの男が固めてメイドの動きを封じる。

どの男の顔も人をいたぶる悦びに歪み、そして醜い笑いを張り付かせていた。

不穏な空気がまた高まつてくる。

三人が一斉に仕掛けた。

わずかにナイフの動きの方が早いと見たメイドが左へと飛んだ時、そこへ木刀が待っていたように振り下ろされ、それをかわす少しの動きの間に、彼女の右手にチエーンが絡みついた。かろうじて後ろのナイフを蹴り上げてかわす。

左を開けておいたのも、三人の攻撃のズレもすべて罠だつた。

鉄でできたチーンはどういう仕組みなのか、メイドの腕に絡み付いて離れない。

「ちょっと！ 服汚したツケ、高いわよ、動きを封じられてもなお、メイドは不敵にそう叫ぶ。囲む男たちはニヤニヤと笑っているだけだ。誰も口をきかないところが、かえって隙がない」とを感じさせて不気味だ。

「兄ちゃん、これヤバいって！」

階段で木刀に襲われた男を介抱しながら下を見ていた玲が、隣のシンの腕を引いてそういった。

出てゆこうか迷っていたシンが、もはやこれまでと足を踏み出した時、また三人が動いた。

チーンが強く引かれ、腰を落として耐えたところへナイフと木刀が斬りかかる。

どちらかが動きのとれない彼女に当たると、玲は目をつぶった。

その刹那、メイドの左手が一度光った。

斬りかかる寸前でナイフと木刀の動きが止まり、フリーズしたような一秒の間の後、二人がどつとその場に崩れ落ちる。気絶した二人の顔のそばには、細長く光る短刀のような物が落ちていた。

「兄貴の小柄術だつ。初めて見た・・・・・・」
「唚然としてシンがつぶやいた。

「さあて、あんたには服のお返ししなきやねー。」
肉食獣の瞳がチョーンの方へとむけられ、睨まれた男がビクッとする。

メイドがグイッとチョーンを引いた。

釣られて男が固く握り締めた時、白い網ストッキングに包まれた足が高く上がり、まず真横、そしてしなるよつに正面蹴りへと変わって、男のわき腹と顎に決まった。

テコンドーぱりの一一段蹴りに、男の身体が吹っ飛ぶ。
が、握ったチエーンに絡まってまた前へ帰ってきたといひで頭がかえられて、重い膝蹴りが入った。

鼻骨が碎ける鈍い音が階段の上まで聞こえてきて、顔をしかめて玲がつぶやく。

「・・・・・痛つたそつ」

四人を完全に鎮圧してしまったメイドさんに、わーっとホームレスたちが駆け寄った。

「すげえ！あんた強いなあ」

「こいつらに仲間が何人もやられてんだ」

「よかつた・・・・これでしばらくなつくり寝らるよ」

賛辞と喜びの声が寄せられる中、メイドさんがはにかんだ笑みで彼らに答えていたとき、地下街の照明とは別のまばゆい閃光が辺りを照らした。

はつとメイドさんのが光の方を向いたときに、もつとフラッシュ。そしてすぐ、少し鼻にかかる声が響き渡る。

「そこまでー、バツチリ撮つたからね、あなたつ」トントンと軽い足取りで階段を駆け下りてきながら、頭上に高く「ジカメを掲げて見得を切つた女の子に、メイドさんの顔が凍りついた。

「ありやあ、タウン誌のおじょつかやんじゃねえか」「ひせしづりおじさん。元気だつた? セッキやられた人はあたしが手当してもう大丈夫だから。」おどりいた顔でホームレスの一人がそついたのに笑顔でこたえながら、ゆっくりと玲はメイドに近づいてゆく。

口と皿を二二四四のように並めて笑う女の子に、メイドさんが震えだす。

「あの子は大丈夫だよ、おねえちゃん。記者だからつこでに記事にしてもらえ。街の有名になれるぞ」あれほど強かつた彼女がなぜこんな少女を恐れるのか不思議だつたけれど、ホームレスの辰さんは氣をきかせてそついた。が、その言葉に、ダーシとメイドさんの顔に黒いすだれが下りてしまつ。

「ダメだ・・・・・終わつた・・・・・俺の人生・・・・・・・・

小さくそつづぶやく洋一の姿を見て、階段の上にいたシンがうなだれる。

「・・・・・すみません兄貴。でもこうするしかあなたを守ることはできないんです・・・・・許してください」

こうして洋一と玲は出会った。
ボーイ・ミーツ・ガールならぬ、ヤクザ・ミーツ・JKであった。

「うわあー、なにこの数と種類！？ しかもオーダーメイドっぽい服ばっかじゃん！ これって全部あんたが集めたわけ？」

「いや、俺の母親ので・・・」

「うつ、見たことない高っかそうなブランドのバッグがいっぱい！ あなたの母さんってお金持ち？」

「うん。かあさんは関西の本部筋の組の娘だから・・・」

洋一の女装姿をカメラに収めて、半ば脅迫氣味にやつてきた彼の母のマシンション・・・・・いや、すでにこの名は適切ではなく女装ルームと言つた方がよかろう・・・・・で、そのコレクションを見た玲は、ど胆を抜かれたというかあきれたというか、表情に苦労して、ふーっとため息をついた。

----- 意外とこの男の女装壁つて母親の影響じやないかな？ するどいカンであつた。

リビングに戻つてソファーにびっかりと座ると、うなだれて立つているアリストメイドの男をじろりと見た。

「・・・・・マイク落としてきて」「え？」「早くー」「あ、はい・・・

小走りにバスルームへと駆け去る洋一の背中を見送つて、ふんと意地悪そうに鼻を鳴らす。

「ほんとにあれでヤクザなわけ？ 信じらんない

バスルームからもれる水音を聞きながら、あらためて部屋を見渡してみる。

普段人が住んでいないとはとても思えないほどきちんと清掃され、また整理されていた。

赤い一人掛けのソファーや、明るく柔らかい色のカーテン。壁に掛けられた絵や数々のインテリアを見て、玲は洋一の母親の趣味の良さを感じた。

「…………でも息子がアレじやあねえ」

またふーっとため息をついていたら、バスタオルを肩にかけた洋一が戻ってきた。

「…………落としてきた」

「じゃ、そこに座つて」

ちよこんと向かいのソファーに腰をおろした洋一を、じろりと見る。完全に男に戻っているが、一いちらをビクビクとした目で見上げる仕草がまだオンナだ。

そんな男があそぶあそぶ口を開いた。

「あの…………写真なんだけど」

「ちよつと待つて！ まずはこいつなつた経緯から話して。それから考えるから」

「…………」

ぴしゃりとさえぎられてまた洋一はうなだれたが、尻尾を完全に掴まれて観念したのか、ぽつぽつと女装へと至った道を語り始めた。

ヤクザの息子といふ立場で育つてきた自分と本性との葛藤。

そしてヤクザ渡世に対する不安と不満。

あの夜の女装子との出会い。

女装による快感と解放感。

とつとつと語る洋一の告白に耳を傾けながら玲は、特殊な環境で育つてきたこの男の人生を想像して、なにやら感慨深いものを感じた。やがてそれは彼女の中であることへと変換され、熱く大きくなつていいく。

うつむく洋一を見つめる玲の瞳に、いつしか力強い輝きが宿つていた。

「……わかつた。あんたがやむをえず女装に走つたその気持ち、あたしにもわかる」

すべてを話しありて大きく息を吐く洋一に、玲は優しくそう言った。その言葉に、はつと彼は顔を上げる。

玲と洋一の視線が空中で絡み合い、彼は彼女の目の奥に、自分に対する自愛を感じて顔を輝かせた。

「…………ああ、この子はわかつてくれる。この誰にも言えない苦しみと立場を…………この子なりきつとあたしを悪いようにはしないはず

突然あらわれた理解者に、恋の予感にも似た歓喜を感じながら、ドキドキする胸を押えていった。

「じゃあ写真は……」

「これからもバンバン女装しなさい！あたしがサポートしたげるつ」

この娘は女神かと本気で思い、感動に心はむせび泣く。洋一は目を輝かせながら、両手を組んでいった。

「や、それじゃあ写真は……」

「メイクや今風の格好も教えてあげるー！」のままじゃ昼間とか違和感あるし」

「あ、ありがとう。それで写真を……」

「そうね。メイドをベースにもつとコスプレ要素を加えて……」

で、街に巢食う悪党と戦う・・・・」

さすがに話がかみ合つてないことに洋一は気づいて不安になつたが、毒を食らわば皿までとおもつてまたいた。

「あの、それで写真は？」

「戦闘乙女？いや、違う・・・・天使？これも違うわね。てかエンジニアルって年じゃないし」

「なにいってんの？それより写真はどうなるの？」

「うつせこーーちょいだまつて」

「・・・・」

数秒考えてから玲はガバッと立ち上がると、指を洋一に突きつけて叫んだ。

「天女！ そうよ戦闘天女！ あんたはこれから、人々に愛と平和をあまねく与える天女として生き、そして伝説をつくるのよつ！」顔を上に上げて、狂つたように高笑いしばじめた玲を見て、洋一の顔が蒼ざめる。

「おい、なんだよそれ！ おまえ魔法少女物の見すぎだろそれ！」ソファから飛び上がって立つと、声を男に戻してヤクザアイで睨みつける。

だがこの娘は、その鋭い視線をかゆいとも感じてはいない。舌打ちするといった。

「チツ、ほんとうつせいわね。男のくせに細かいことをウジウジと

「細かくねえ！ おまえ普通じゃないぞそれ。言つてゐ」とムチャクチャじやねーか！」

「女装コスプレのヤクザにいわれても、なーんにも感じないよーだぐつと言葉に詰まる洋一に、ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべると、

玲はゆっくりとポケットから腕を引き抜いて、握っていた手を彼の鼻先で広げた。

手のひらにちょこんとのつていたのは、小さなボイスレコーダー。それを見た洋一が、瞬時にガマガハルのよじて汗を噴出させる。

「ふふーん。さつきの告白もちやーんと録音をさせていただきまして。でもあたし脅迫とか好きじゃないから、自発的に協力してほしいんだけど・・・・」

「メツチャ脅してるじゃねーか！ てめえ本職脅してビうなるかわかつてんだらうな！」

「うん！ あたしがビうてなるつてことは、あんたもそうなるつてことでしょ？ つまりあたしたちはペア・・・チームつてわけよね。あ、ちなみに写真はデジカメからSDチップでケータイに移し変えてメールであたしの部屋のパソコンに飛ばしてあるから。玲になんかあつたらこれを公表してくだせーい！ って書いてね」「・・・・」

「そだ！ 神戸の本部だけ？ そつちがよかつたかなあ・・・ね、どつちがいい？」

「こ、神戸だけはカンベンしてくれ！」

「じゃあ神戸にしょっと」

ぐうとうなると、洋一は床に膝をついた。

その肩にポンと玲が手を置く。

「やだあ。そんなに心配しないでよ、悪こようになしねーって。それここんなのただのお遊びじゃん。ね、おじさん？ わつと樂しいよ、これから」「じやあ神戸にしょっと」

軽く微笑んでそうこつ玲のことを、キレた目つきで睨む。

「- - - - 悪こよひこせ、なんてこつやつは絶対に悪こよひこすよひよひで、るんだつて！」

さすが本職、的確な読みだ。

奥歯をかみ締めて心中でそう叫んだが、事態は口の手を離れてこの娘に握られている。

従うしかないのだ。

そう思つたとたんに、鬼のようだつた洋一の顔がだらしなく歪み、咽喉から嗚咽がこみ上げてきた。

「えつとね、あしたまでに綿密なプランたててくるから、メアドとケーブルおしえといて。あ、そうそうー、あしたはあたしがメイクしたげるから。もつとつまく化けるよ、楽しみねつ」

男泣きになく洋一の前で、玲は自分の世界に入り込んでペラペラとしゃべつている。

彼女の目にはすでに彼の姿は映つておらず、爆発するように湧き出すこれからプランをまとめるのに夢中になるのだった。

「いたぞ、こつちだ！」

男の声があがり、数人が自分の方へと駆け寄つてくる。ヤバいと身をひるがえして逃げ出す背中に、フラッシュの風が襲い掛かった。

「あんな娘の言つことなんか真に受けなきゃよかつた！」

その夜も玲の指示通りに女装して街へ出た洋一は、待ち構えていたギャラリーにたちまち捕捉され、逃げ回っていた。

だが、走つても走つても、物陰や店から黒い人影が湧いてきて、必ず見つかってしまうのだ。

「わっ！」

足をひねつて転倒した。

痛みに顔をしかめて足元を見ると、靴のかかとが折れている。

洋一はハイヒールを脱ぎ捨ててまた駆け出した。

だが数メートルもゆかぬうちに、コンクリートで囲まれた袋小路に入り込んで、立ち止まってしまう。

咽喉の奥でうなりをあげる間に、ものすごい数の人を取り囲まれて、目もくらむようなストロボがたかれた。

「やめろー！写真を撮るなつ、カンベンしてくれ」

顔を手でふさぎ、うつむいても、眩しい白い閃光は止まない。

やがて自分を囲んだ人々の中から、たくさんの手が伸びてきて・・・

「・・・・・若、若」

「つづり、ゆるして・・・・」

「若つー、どうしたんです若ー。」

「ぐわあああああ！」

はっと目覚めると、そこは組事務所の中にある自分のデスク。白髪の男が正面から、シンがすぐ横から困った表情で自分を見ている。

「ああ・・・・夢・・・・だつたのか

動悸うつ心臓を静めながら、洋一は額の汗を指でぬぐつた。

「若。どこか身体でも悪いんで?」

白髪の男が野太い声でそつたずねてくる。

中肉中背だが、ダークスーツの上からでもそつとわかる、鍛えた身体をした初老の男である。

浅黒い顔に、白目が勝った三白眼と左頬の赤黒い刀傷が見え、それがこの男もヤクザであることを示していた。

二代目の相談役。つまり洋一の極道渡世指導教官兼、お目付けの真ま
渦うず 雄五郎おうじやう 60歳であった。

「医者の手配をしましょ」

そういうつて雄五郎はシンに目配せをする。うむを言わさず病院へと連れてゆく氣だ。

洋一がうなされていた原因に、なんとなく心当たりがあるシンは、
そういうわれてとまどつ。

「いや大丈夫だ。ちょっと昨夜のみすぎちまつてな

「一度医者に見てもらいましょう。二代目に何かあつたら、俺が工
ン口飛ばしたくらいじゃおつきませんから」

重々しくやう告げる雄五郎の顔を睨み付けながら、小さく呟ふ。

「俺がいいつて言つてんだ。ヤクザがいちいち身体がビリのつて騒
ぐんじやねえ！それこそかつこがつかねえだろうがつ」

「・・・・さすが若。見事な渡世の心意氣です。これも日々の任侠
道の賜物ですな」

暗に自分の指導のおかげ、といつ部分を濃厚に匂わせて雄五郎がつ
ぶやく。

舌打ちしたいのをこらえて、洋一はそっぽをむいて煙草をくわえた。
彼はこの雄五郎が煙たくつてしかたないのだ。

思い起こせば、まだ自分が幼少の頃からこの男はすでにそばにいて、
事ある」とに極道として生きることとその精神を強要してきた張本
人の一人だった。

ヤクザの道に疑問を抱いていた洋一は、ことじとく雄五郎に逆らつ
てきたのだが、この脳が極道という厳で出来てる男は、彼をなだめ
もすかしもせずに直球、上段から心を打ち据え、真直ぐに渡世へと
引っ張つてきたのだった。

こういう人物に少々の手管は通用しない。

なので洋一は、父・義隆以上にこの男が苦手なのであつた。

煙草に火をつけて、煙を天井へと吹き上げながらたずねる。

「で、なんか用か?」

「はい。組外の義理事の件です」

「言つてみろ」

「会長の指示で、これまでできるだけ若に義理掛けに行つてもうりつておりましたが、どうも若是積極的に他の組との友誼を深めてくれません。今日はそのことを一つ申し上げに参上しました」

ようするに、お小言をこにきたのだった。

洋一の田の前で雄五郎は、とうとうと極道同士の付き合い、つまり義理事の必要性を語つて止まない。

その小姑のような口調と態度が嫌いな彼は、顔をしかめて煙草を吹かす。

だが「一代田オーラをそよ風とも感じぬ」の老極道にはかなわず、ただ聞いているしかない。

お説教は小一時間に渡り、洋一の精神を痛めた続けた。

「このままでは示しがつきませんので、若をどいかの組織に一時預かりしてもうりつて、一から渡世のことを学んでいただこうと・・・・」
「ちよい待て!そりやおまえが言つてんのか?」

「ちよい待て!そりやおまえが言つてんのか?」
話を途中でさえざると、洋一は剣呑な声をあげた。

「こえ、会長です

「チツ！」

「うえあれず舌打ちしてしまつ。

-----あのエロヤクザが！てめえは一ダースの妻とよりしくやつてんのに、まだ俺を檻に閉じ込める氣かよつ

好色で銭金にがめつゝ、息子であつても心を許さないといつ、ヤクザになる為に生まれてきたような義隆の顔が脳裏をよぎつて、その不快感に身震いしてしまつ。

あの美意識のかけらもない男を洋一は呪つていた。

その分だけ、真逆である母を慕つてきたといつていい。

考え込む洋一に最後に雄五郎は告げた。

「とにかく。このままでは会長の指示通りに行儀預かりにせざるをえません。相談役として申し上げます。もつと身を入れて極道渡世、ひいては義理に精を出してくださー」

そう言い終え、びしりと一礼すると、老極道は部屋を出て行つた。

バタンとドアが閉まつてから、煙草をひねり潰して洋一が罵る。

「なーにが相談役だつ。口を開けば渡世渡世つて、おまえはアザラシかつての！」

「兄貴・・・・・それを言つならオットセイです」

「お、そうか？」

氣の毒そうな目で自分を見つめているシンに、強いて明るくいう。

「ちやーんとやつますよ。これまで以上にきつちりキリキリつて、このシラ見せて回つてやるわー！」

おどける兄貴にシンが引きつった笑みを浮かべる。

実は彼の心配事の全ては、一代田の女装癖にあるのだが、そんなこと

は知らない洋一は、無理に笑顔を繕い、変な声で笑い続けた。

メイク

そして太陽が沈み、やがて月がのぼつて夜になる。

午後10時。

母のマンション改めここ女装ルームで、玲と洋一の初女装ミーティングが開かれていた。

何を強要されるのかとおどおどする洋一だったが、まずはメイク講座といふことで、ほっと安心した。

「いい？ まず女装前に大事なこと。それは髭、ヒゲの処理ね。あんた、自分はヒゲが薄いから大丈夫とか思ってるんだろうけど、全然ダメ！ 照明あたればバレバレよ。剃つてもね、隠し切れないの。毛穴のポツポツとかも女の子じゃないしね。 で、まずは抜く！」

そういうて銀色に輝く毛抜きを出してみると、ぎょっとする洋一の耳をしつかと掴んで、情け容赦なくヒゲを抜き始めた。

「いたい、痛いって！ せめてタオルで温めてから・・・・」「うつむきーあんたヤクザでしょ？ こんぐらー我慢しなきよ、ほら修行だと思つてさ」

「そんな修行あるか！」

聞く耳を持たず玲は毛抜きを使い続け、やがて全てのヒゲといふヒゲが抜かれて、洋一の顎は血だらけになつた。

「これでよしぃと。後はあたしが持つて来たSAPコンシーラで毛穴

を隠せばOK。あとあんたね、アイラインの引き方がヘタ・シャドウのぼかしひかも。昭和のオカマじゃないんだから、ベッタリ塗ればいいってもんじやないの。いい? 鏡見てなさい」

洋一の顔を鏡の正面に向けると、自分は彼の膝の間に座り込んで、チユーブから褐色の液を手の甲に少しづつ出して塗り始めた。

見る見るうちに顎が平らになつてゆき、やがて完全に毛穴と青い部分が消えてしまつて洋一はおどろいた。

「これ舞台用の強力なやつだからね、市販品よりいいよ、高いけど。あ、領収書もらつてきてるから後でお金おねがい!」

ヤクザに領収書つて、と鼻白んだが、彼女はそんなことにほかまわらず、今度はアイビューラーとリキッド状のライナーを出してきて、まずまつ毛をグリーングリンに上へと跳ね上げてから、慎重な手つきでアイライナーを引き始める。

「まつ毛のね、根本をちゃんとつけてついつく感じでまづは埋めていくの。あんたいきなりベタツつていつてたでしょ?」

うんうんとうなづくと、頭をはたかれた。

人生初の頭はたきに唖然とする彼に玲がどなる。

「うーくなーズしてへんになるじやない、もう。リキッドのライナーは決まると田がパツチリだけど、その分むずかしいんだからねつ」

玲は、ものすく真剣なまなざしをして、二重まぶたの下、まつ毛のギリギリのラインを縁取つてゆく。

「よつしー。次はシャドウね。お水とかならパープルでもいいけど、今夜はもつちよいナチュラルにラメとかも控えめでいくね」たくさんの色が並んだパレットに、シャドウスティックをはたはたとつけ、ポンポンとまぶたの上あたりにはたくようにつけてから、

わざと指で広げてゆく。

やがて出来上がった自分の皿を見て、洋一は驚嘆の声をあげた。

「わあ！ すん」「パキつとした、皿が

「でしょ？ じゃ、落としてきて」

「え？」

「え、じゃないわよ。次は自分で最初つからやるのー覚えらんない
つしょ、やらないと」

「・・・・・あい」

それからも玲のメイク指導は、若干いじわる氣味にて一時間に渡つて
続いた。

「まあはじめはこんなとこかなあ。あとは回数かさねて慣れだから
ね」

なんとかお許しのでた顔を、改めてじっくりと見た。

「たしかに今までとは全然違う・・・・・。ですが本職
だ！」

胸が高鳴つてくるのを感じる。

そして頬を喜びでほころばせていると、また玲のきびきびとした声
が飛んできた。

「次、ウイッグ付けて！ 髪のセット教えるか？」

「はい！」

なぜか女子高生に顎で使われて、喜んで従つてゐることに彼は気づいていない。

多種類のブラシや櫛の使い方、服やイメージによる髪型の整え方など、一から彼女は教えてゆく。

「女装でも普通のお化粧でも、なんでもイメージなの。それを綺麗に描いてその通りに演出する・・・・・つまり皿口自演の自分を絵に描くみたいな感じ？だからこれからは女性誌とか見てもっとイメージをふくらませなさい。ほら、買つての恥ずかしいだろうと思つて持つてきてあげた」

そういうつて玲はスポーツバッグからたくさんのファッション系雑誌を取り出すと、洋一の鼻先に突きつけた。

ついでに領収書を渡すのも忘れてはいけない。

それでもまだミーティングは終わらない。

服の着付け、またその種類や見た目にに対する印象など、日付が変わつても指導は続く。

「で、今夜はどんななかつこしたいわけ？」

「…………ナース」

顔を真っ赤にしてうつむけた洋一が、消え入りそうな声でつぶやく。

「はア？この真性のヘンタイがっ！そんなのあるわけ……あれ？あるじゃん。なにこれ…？　あんたのお母さんっていったい…………」

その先を言おうとしたが、あまりに洋一が恥ずかしそうにしているので止めておいて、玲はなぜかワードローブにかかつていたピンクのナースセットを取り出すと、さも嫌そうな顔をして前に突き出した。

「自分で着て！　ヘンタイコスはあたしの範囲外だから」

「…………」

しかたなく洋一は一人でそれを着た。

玲はふてくされた顔でそっぽを向いていたが、要所ではちらりと見て短く指導する。

やがてナースへと変身を完了した洋一に彼女はいった。

「まずそこに座つて！」

「はい」

なぜかフローリングの床の上に正座したので玲はおどろいたが、ソファーに座れといい直すのも面倒だったので、そのままにした。

「これから言つのが一番大事なことね。まずは戦闘天女のコンセプトです」

「すみません…………その名称は確定ですか？」

控えめに言つた質問は無視された。

「いい？きのうあんたがホームレスの人たちに差し入れしてるので見て思ついたの。天女はまず、街の弱者に喜びを運ぶ役目をします」

「それってどうしたこと?」

「ええっとね。差し入れとかはもうひん続けても「ひりがひ、ひりか
かって」と、変な男に絡まれてる女の子を助けるとか、道いつぱ
いに広がって通行の邪魔になつてゐる奴を指導するとか、そんなトラ
ブルシユーターみたいな感じかなあ、たぶん」

「こつ本当は思つてきで言つてやがる、そつ洋一は感づて玲をこ
らんだが、彼女がこつちをむくと笑顔になつてこつた。
「えつと、じやあこままでみたいに不良をやつつかむひりか
い?」

「うーん・・・・・・ ほんとはもつと慈善的な」としても「ひり
んだけど・・・・・・ まあそれはまた考へとへー。」

「・・・・・・・・」

「なによ? ちやーんとあんたが大っぴらに女裝できぬよつに考へ
てあげてんのになによ、その田は?」

「いえ・・・・・ なんでもないです」

嫌な目つきで玲は洋一を見ていたが、やがてふんと鼻を鳴らすと話
しに戻る。

「でね。あんたのその活躍をあたしが記事にして、やがてそれは街
の伝説に・・・・・」

「ちよい待つた! それ話がちがつし。バラさなこつてあんた言つた
つしょー!」

「はあ・・・・・・ 言葉遣いも指導しなきやだわ。それは置いと
いて。うん、あんたの正体はバレないよつにひやんとするよ。その
ために完璧なメイクも教えたんだし」

「でも写真でバレバレだろ! しかも記事なんかになつて大勢が見に
きたりしたら・・・・・・」

昼間に見た悪夢を思い出して身震にする洋一に、こともなげにあつ

さりと玲はいつ。

「だーいじょうぶだつてば。もつ一回鏡みてみなさい。その顔とボーズ頭でヤクザ顔のあんたを結び付ける人なんていやしないって。それでも心配なら、昼間はもつと恐そうな顔してることね」

「・・・・・・」

「それに、他の手も打つてあるし」

「なにそれ？」

洋一の質問にはこたえず、腰に手を当てると、玲は高らかに宣言した。

「さあ、天女さまの初仕事よ！ きあい入れてこーっ

黙つて上田遣いで自分を見上げている洋一を玲が叱りつける。

「ほら、もつと楽しそうな顔しなさいよ！」

先行き不安でとても楽しめそうにはなれなかつたけれど、今はこの娘のいうことを聞かなくてはならない。

拳を突き上げて気合を入れている玲に従い、洋一はアイライナーで書いた目尻を上げて、小さな声で「おーっ」といつて手をあげた。

マンション前に止めたあいふれた紺色のワゴン車の中でシンせつぶやいた。

思わず目を惹いてしまひ。

大きなため息を吐き出してから、気を取り直して車を降りると、気がつかれないように一人の後をつけ始める。

そう、彼こそが玲のいた他の手、なのであつた。

彼女の指示や機転では力ハリしきれない出来事 - - - - 本職や警察の介入 - - - - といった事態が起つたとき、シンがこつそりと、あくまで洋一に気づかれないように処理する。

それと自分たち以外の第三者が洋一をスケートショーとした場合の妨害。

暗闇から街灯の下へ。

本居宣長の「日本書紀傳」は、その書名からも分かるように、日本書紀の傳説を主とした歴史書である。

「玲のやつ、兄貴をどうしようっていうんだ。もし少しでも迷惑をかけるなら、いくら可愛い妹でも、ケジメはつけなくては……」

そう一人ささやくが、今のシンに玲の指示以上のことなどできそうにならない。

だから不本意ながら、じつは影で見守っているのだ。

「しかし、兄貴は女の姿になつてもカツコイイ……」
うつとりと洋一の後姿を追いながら、シンは初めて彼と出会つた時のこと思い出していた。

目標のない大学生活にいやけがさしていた時、街でしつこいキヤッ
チに捕まつて往生していたサラリーマンを助けて、地回りのヤクザ
ともめてしまつた。

五人を返り討ちにしてしまい、残る一人が懐に飲んでいたドスを抜
いて自分へとむかつてきた時、洋一は現れた。

「バカヤロウ！ カタギに光りもんむけて、それでもてめえ渡世人
かつ」

その一喝でドスを納めさせ、次に輝く白い歯を見せながら洋一は自
分に笑いかけた。

「兄さん。とんだ行き違いですまないが、ちょいと訳をあつちで聞
かせてもらえませんか？」

そう誘われて入つた静かなバー。

ここで何か無理難題をふつかけられる、そう緊張したが、洋一は氣
を使って店の奥に隠すように自分を座らせてから、ちゃんと話を聞
いてくれた。

始めに突っかかってきたのは向こうの、ばかりは非を出したから謝ったこと。

だが自分の指摘した非で、相手が激昂して殴りかかってきたことなどを、正直にシンは話した。

彼の性格なのが、まちがつたことが嫌いで、それゆえに大学でもプライベートでも孤立していた。

誰も自分の相手をしてくれず、言えない言葉ばかりが胸の内に貯まつてゆく毎日だった。

シンの話を洋一は真剣に聞き、また地回りとキャッチの関係や立場も語ってくれた。

「たしかにやつてゐる」とはひどいことです。あたしも少しはマシン稼業になればとおもつてやつてはいるのですが、まだ若輩の身で、なかなかつまといません……それで街の皆さんや兄さんここまで迷惑をかけてすまないと思つてます」

そういうつてから、かなり立場は上だと思われる男は、自分に頭を下げて謝つた。

その素直な態度にかえつてシンの方が恥縮してしまって、こちも塗我をさせてすまないと謝る。

話が収まつたところで洋一は、はははと涼やかな声で笑うと、まるで子供のような顔になつていつた。

「それでも兄さん強いねえ。あいつひつひつの中でも腕つぱしじやかなり上方なんだぜ」

がらりとくだけた口調になつた洋一は、いつしかシンは心をまだされていた。

手打ちだといつてその場で酒を酌み交わす内に、いつの間にかシンは、日頃かかえている鬱屈した思いまで語ってしまったのだった。

全てを話し終えた後、恥ずかしさで赤面してしまった自分に、優しそうな目をむけて洋一はいった。

「シン・・・・って呼ばせてもらつていいか？ おまえ、いい奴だな。俺はこの通りのヤクザなんだが、カタギの連れもほしこつもおもつてたんだ。嫌でなけりや、たまに会つて話を聞かせてくれないか？ もしおまえに迷惑がかかるなら、すっぱり目の前から消えるから

始めは目をみながらふつきらりぼうにしゃべっていたが、言い終えると少しばにかんだ表情になつて、洋一は顔をそらせた。

シンはその時、洋一が見せたわずかな揺らぎの中に、自分と同じ孤独を感じ取つた。

-----この人は助けを求めている

そう思つた瞬間、おもわず言つてしまつていた。

「あなたの元で働かせてください。おねがいします！」

洋一は笑つてその言葉を取り上げなかつたが、日々日参するシンを持て余して、半年後ついに受け入れてくれたのだった。

こうしてヤクザとなつてしまつた今思い出せば、それは稼業としての人集めの一環だつたろうとおもつ。

だがシンは、あの時の洋一の顔と口調の裏に感じたものに間違いはなかつた、いまでもそう思つてゐる。

日々接する兄貴との時間の中で、その思いは色々な形で段々と硬く強くなつていった。

『兄貴を助けられるのは俺だけだ』

その想いが今のシンの全てを支えていた。

懐かしくも切ない回想が終わり、シンの目がふたたび己が兄貴の姿をとらえる。

・・・・・ 兄貴・・・・・ あなたのお背中はこの汎島 心が必ず守つてみせますつ
心中そう叫んだシンの視界に、桃色につゝめく艶めかしい腰が揺れている。

「あ、兄貴っ。でもその服はあまりに短すぎではないですか！？」

そう。

洋一の着用しているピンクのワンピース風ナース服は、膝上15cmのタイトなミニであった。

自分の発した言葉が、男に対するものではまったくないことに、この忠実な付き人は気づいていない。

ため息をついたり顔を赤らめたりと、忙しい両面相をしながら、あくまでこつそりとシンは一代目をつけ回すのだった。

悲しい事実ではあったが、その姿は平成の世では、「ストーカー」と呼ばれる。

「ねえ。あんたってめつちや強いけど、武道かなんかやってたわけ?」

お惣菜コーナーで、あつたけのお弁当を買つて物かごに投げ入れながら玲がたずねた。

「ん~っ、剣道と空手は学生の時にちょっとやつたけど……

あ、あと母さんに教えてもらつたのとかもか。…………てかちょっとーーその「あんた」っていつのやめてくんない?なんか感じ悪いから

棚に並んだ酒瓶を押してこるワゴンの中へ呂を落しながら洋一がこたえる。

「ああそうね」と初めて気がついたような顔をして、玲はうーんとうなつて考え始めた。

「せめて苗字で呼んでもよなつ」と洋一はプリプリしながらワゴンを押すと、今度はおつまみコーナーにある物をカゴへと落としだした。

「あーー、ペンネームじゃないけど、女装のときだけ女の子の名前にするってのどう?」

「声でけーつて!」

シーツと人差し指を口に当て、あわてて注意する。

だが玲はまったく気に留めず、自分の思いつきに没頭していた。

本当にシンと同じ遺伝子を持つて生まれたのかと疑いたくなるくらい、玲は血口中心的に洋一にふるまつていた。

洋一で玲のために断つておくが、じつこう態度は洋一に対してもみ

であり、高校生なのに半ば社会活動をしている彼女は、必要な場面ではいくらでもお淑やかに、そして女らしくふるまえるのだ。ただし、本性は今、なのだろう。

「あ、じじみの干物！」

洋一が喜んで見つけた獲物を手にしたといひで、玲がすつとんきょうな奇声をあげた。

「凛花・・・・・ そつコンカにしょー 女装の時の人たちは凛花ね、きまつーつー！」

「だから声でけーつてばー！」

「リンカネー シヨンからひらめいたのよ。あ、そつにつてもバカなあんたにはわかんないよね、凛花？」

そういうわれてもどう答えていいかわかりはしない。

ただものすごくバカにされているのだけは感じて、頬を膨らませてそっぽを向いた。

「あーっ、なんか急に親しみ湧いてきちゃつたあ。ねつ、凛花つていいネーミングだと思わない？」

自分の後ろにまわって、肩にあいをのせてくる玲を適当にあしりこながら、洋一は考える。

「- - - - 凛花かあ・・・・・ 母さんの凛つて字がはいってるなあ

もつ一度訂正しておくが、彼は世に言つマザコンではない。もつとも、違ったケースではあるかもしねりないが。

いつの間にか考える洋一の胸元に潜り込んだ玲が、ナース服に付いたネームプレートに「凛花」とペンで書いているのに気がつき、その頭をはたいた。

にらむ彼女の頬をネイルを施した爪で弾いて、洋……これからは女装時は凛花と呼んでやろう……は微笑んだ。

凛花の顔をじろーんとした目で下から見上げながら玲がいった。

「ねえ……凛花って男の子ともエッチできるの？」

ポツと凛花の顔が赤くなる。

いつたい何を言うのかと思つて玲をよくよく見ると、なんだかこの子の顔もほんのり赤い。

「あつ！ あんたお酒のんでもるー？」

「うふふふうー あつたりい！」

くきくきと凛花の髪を撫でながら、玲が笑顔でそうこたえる。

実は、女装ルームで彼がメイクを落としにバスルームへ出たり入ったりを繰り返しているとき、退屈した彼女は、凛の酒コレクションに目をつけて、それらをちょびちょびと味見していたのだ。しかもセレクトされた酒は、ことじとくアルコール成分の高い蒸留酒であった。

「あはははは、酔つてこんな感じなんだ。なんかきつもちいいつ！」

「ね、ねえ大丈夫なのあんた？」

「もつち、いけるわよー！」

凛花の目にはとてもそうは見えなかつたが、玲は元気よくそつ答える。

そういうわれると主導権を握られているし、女装名・凛花とまで贈られた手前、やからうことができない。

「とりあえず出ましょ」
シブイ顔になつてレジへむかうと、支払いを済ませてスーパーを後にした。

両手に大きな袋を提げて、颯爽と歩く桃色ナースと少女のペアは、深夜と言えどもかなりの注目度であつた。

ヤバいなあ。高校生といつしょじやポリとか職質かけてきそう・・・・・。 ハラハラする凜花の気も知らず、彼女は上機嫌で鼻歌をうたいながら、大手を振つてついてくる。

警戒のため、切れ長の鋭い目を辺りに配つてゐると、玲が持つている袋の中に手を突つ込んで、ヴァフィータジンの瓶を引っ張り出した。

あつと思つたが、すでにこの娘はオヤジのようにラッパ飲みして、「ふつはあ～つ」とかやつてゐる。

「ちょっとあんた！高校生なのに飲みすぎだつてば、自分は中学の時から飲んでいたことを棚に上げて叱る凛花を横田でじろりと睨んで玲はいう。

「…………凛花」そその「あんた」ってのやめてよね。玲ひでちやーんとした名前があるんだから。だいじょうぶだって。うちの家系はお酒強いんだから」

「ふつは～あ。　お酒つて味ないけどなんかたのしいね。てかさつ
きの話のつづきなんだけど、あの夜にさ、ナイフ投げてやつづけて

たでしょ。あれも武術かなんかなの？」

「ああ、あれはナイフじゃなくつて小柄ね。^{こづか}」 面の武士とかが使つてた、日本刀を小さくしたようなやつ

「へえ、じゃ、あれは剣術かなんかなんだあ」

「うーん・・・・まあそんな感じ？ 母さんの家が代々受け継いでる古武術ね」

急に玲の目が輝きを帯びた。

「おおっ！ ジャ忍者かなんかの末裔とか？ 凜花のお母さんつ家つて」

「忍者つて・・・・映画じゃないんだから。そつじゃなくて、室内で戦う為の術つて言つてた。母さんは一度に十本あやつれるけど、あたしはまだ五本がせいぜいだけだね」

「わあ！ ジャあじやあ今夜もなんかあつたらまた見れる？」

「だーめ。あれはほんとはあんまし人に見せちゃいけないものなのでか玲。あんた騒ぎになるの喜んでない？」

きつい目になつて睨む凛花に、ふるふると玲は首を横に振つてみせる。

そんなことを話してこるついで、地下街の入り口が見えてきた。

重い袋をよいしょとゆすりあげて、一人が階段のところまで来た時、横合いから和服の女がすつと姿をあらわした。

ぶつかりそうになつたのを双方で避けると、女は小腰をかがめて会釈した。

その顔を見て凛花がうつとうめぐ。

----- あ、綾乃！

おもわず口にしそうになつて、あわてて手でふさぐ。

そう、彼女は洋一の愛のハーレムを構成している一人。
この街ノ。一の夜の蝶、綾乃であつた。

年は29歳と少々高めだが、抜群の肢体と静かな知性を併せ持つ、
女帝といったオーラをまとう女人である。

「可愛い綺麗は当たり前」のこの世界で、男はもちろん何人もの女性から「姉さん」と慕われ尊敬されている彼女には、洋一だけなくシンも一目置いていた。

目の前でフリーズしているナースに、綾乃は少し不審な目をしたが、そこは夜の嗜みですぐに温和な笑顔に戻ると、もう一度丁寧な会釈をして歩き出す。

そんな二人を交互に見ていた玲は、去つて行く綾乃を見ながらささやいた。

「知つてる人なの？」

「あ、ああ・・・・・まあな」

言ひよどんでいるし、男言葉に戻つてもいたので、これは彼女かなんかだと察した玲が、ふーんとうなる。

「まつ、バレなくつてよかつたじゃん。あたしの言つたとおりつしよ？その姿なら誰もヤグザだつてわかんないつて」

「しーつ、声でけーつて！」

小声で注意してから、凛花が早く立ち去りつと階段に足をかけた時、
背後で

「あの・・・・ちょっと失礼」と涼やかな声がした。

ぞくりと立ち止まる背中に、とべりとしたおだやかな口調の言葉が降りかかる。

「どうかでお会いしますよね？ ちゃんと」と挨拶もせず、じつも失礼しました」

「……や、ヤベえ！ 声を出したら綾乃は絶対に俺だと見破るだろ？ じ、じつしよ…？」

脂汗を流す凜花に、道を引き返してきた綾乃がゆりべりと歩み寄つてくる。

「お召し物でわからなかつたのですが、お店以外でお会いしますよね。すみません、お顔をもつ一度……」

『いえ、あなたのお部屋で何度も』と凜花はおもつたが、そんなことは言えるはずがない。

もはや絶体絶命かと思われた瞬間、いきなり横からヴィフィータジンの瓶が突き出されて、凜花のわき腹に深く埋まつた。

『……？』

なんとかうめき声はいつられたが、痛みに身体がくの字に曲がる。

「……な、なにすんの玲…？」

かがみ「もつとした彼女の腕を荒くつかむと、玲は大きな声で叫びだした。

「このインランお姉！ よくもあたしの彼氏に手えだしたなつ。毎回毎回、人の男に色田ばつか使いやがつて、このエロ女…」

眉を吊り上げて突然怒り出した彼女に凜花は一瞬とまどつたが、すぐここにはこの場をこまかすための演技だと悟り、とりあえず「この娘に任せることにした。

綾乃から顔をそむけて「わき、恥じ入るような悲しげのような表情を作つてみせる。

容赦の無い一撃による痛みも、この両脚に一役買つていた。

「あたしがちょっと部屋を空けた隙に、彼氏とあんなこんな桃色三昧！うーん、ゆるせん！ あれだけやつといてあたしが気がつかないとも思った？どうせまたそのエロいコスで誘惑したんだしょ。ちよつとこいつちきなさい！ 今日こそ決着つけようじやないの！」言い終わると玲はぐるりと綾乃の方へと向きなおり、

「とにかくと、どこのどなたかご存知ありませんが、あたしたちは取り込み中ですので、これで失礼します」

そう一方的にまくしたてた後、ペニツトお辞儀すると、凛花の腕を引っ張つて足早に歩き出した。

「このバカ姉！コスプレ好きのヘンタイ！それからえつと……尻軽女！」

思いつく限りの罵詈雑言を口にしながら、風のようになつて行く玲と凛花の背中を見送つて、綾乃はその場に立ち去つていた。しばらくそうしてポカーンとしていたが、やがて我に帰ると、「あらあらまあまあ」などとつぶやきながら動き始めた。

数歩行つたところで一度足が止まり、うつむと笑つたような気配がしたが、それも一瞬のこと。

綾乃はまたいつも優雅な足取りに戻つて、店への道を歩み始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5587y/>

女装天女！

2011年12月1日19時57分発行